

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6

—流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・
市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡—

旧石器時代編

平成25年3月

独立行政法人 都市再生機構
公益財団法人 千葉県教育振興財団

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 6

いちのやま いちのやま いちのやま
市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・
いちのやま いちのやま いちのやま
市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡一

旧石器時代編



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第706集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市市野谷中島遺跡ほか3遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、旧石器時代の石器が検出され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡邊清秋

凡　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

市野谷中島遺跡	千葉県流山市市野谷 693-1 ほか	(遺跡コード 220-055)
市野谷向山遺跡	流山市市野谷 494-2 ほか	(遺跡コード 220-036)
市野谷入台遺跡	流山市市野谷 655-1 ほか	(遺跡コード 220-042)
西初石五丁目遺跡	流山市西初石五丁目 62-5 ほか	(遺跡コード 220-045)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は主任上席文化財主事 新田浩三が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導、御協力を得た。記して感謝申し上げたい。(敬称・所属略)

千葉県教育府教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、流山市教育委員会
諫訪間 順、小菅将夫、池谷信之、国武貞克、稻田孝司、織笠明子、須藤隆司、鈴木忠司
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第2～4図 都市基盤整備公団 流山新市街地地区現況図 1/2,500 (平成13年3月調整)
第5図 参謀本部陸軍測量局第1軍管地方迅速測図「流山村」、「我孫子宿」(明治13年測量) 「野田町」、「守谷町」(明治14年測量)
第6図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「流山」[N 1 -54-25-1-2] (平成17年8月発行)
- 8 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。

図版1 在日極東アメリカ軍撮影 (昭和22年8月)
図版2・3 京葉測量株式会社撮影 (昭和48年3月)
- 9 本書で使用した図面の方針はすべて座標化であり、測量系は日本測地系による。
- 10 黒曜石産地推定にあたっては、明治大学黒曜石研究センター 池谷信行氏に分析を依頼した。
- 11 嶺岡産珪質頁岩は、表面が明黄褐色、内部は灰緑色の地に白色・灰色・黒色の斑が混じる珪質頁岩のことを示した。いわゆる「白滝頁岩」や「保田層産珪化泥岩」と同じものを示す。
- 12 ブロックの記載方法は、母岩別器種組成表をブロックごとに掲載した。また、本文中においてブロックの大きさの表現は、(南北) m × (東西) m に統一してある。
- 13 卷末に添付した CD-ROM には、旧石器属性表(全点)、母岩別組成表、黒曜石産地分析結果データ、本書掲載の表・写真図版の一部、及び、石器・出土状況のカラー写真のデータが収録されている。CD-ROM のフォーマットは、Windows、Macに対応する。ファイル形式は、表については XLS (Excel)、写真については JPEG である。ファイル目次は CD-ROM に収納した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の経緯と経過.....	1
3. 調査の方法と概要.....	3
第2節 遺跡の位置と環境.....	4
1. 遺跡の位置と地理的環境.....	4
2. 周辺の遺跡.....	4
第3節 基本層序.....	12
第2章 市野谷中島遺跡.....	13
第1節 遺跡の概要.....	13
第2節 第1文化層.....	13
第3節 単独出土石器.....	18
第4節 黒曜石の産地推定結果について.....	19
第3章 市野谷向山遺跡.....	22
第1節 遺跡の概要.....	22
第2節 第2文化層.....	24
第4章 市野谷入台遺跡.....	40
第1節 遺跡の概要.....	40
第2節 第3文化層.....	42
第3節 黒曜石の産地推定結果について.....	48
第5章 西初石五丁目遺跡.....	55
第1節 遺跡の概要.....	55
第2節 第5地点.....	57
第6章 まとめ.....	70
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1章 はじめに	
第1図 グリッドの呼称例.....	3
第2図 流山新市街地地区遺跡位置図.....	7
第3図 遺跡範囲と周辺の地形〔北側〕.....	8
第4図 遺跡範囲と周辺の地形〔南側〕.....	9
第5図 旧石器時代遺跡分布と周辺の地形（旧況図）.....	10
第6図 旧石器時代遺跡分布と周辺の地形（現況図）.....	11
第7図 基本層序.....	12
第2章 市野谷中島遺跡	
第8図 市野谷中島遺跡調査状況.....	14
第9図 第1文化層第1ブロック遺物分布.....	16
第10図 第1文化層第1ブロック出土石器.....	17
第11図 単独出土遺物分布.....	18
第12図 単独出土石器.....	18
第13図 市野谷中島遺跡黒曜石产地推定結果.....	20
第3章 市野谷向山遺跡	
第14図 市野谷向山遺跡調査状況.....	23
第15図 第2文化層第9ブロック器種別分布.....	26
第16図 第2文化層第9ブロック母岩別分布.....	27
第17図 第2文化層第9ブロック出土石器.....	29
第18図 第2文化層第10ブロック器種別分布.....	32
第19図 第2文化層第10ブロック母岩別分布.....	33
第20図 第2文化層第10ブロック出土石器.....	34
第4章 市野谷入台遺跡	
第21図 市野谷入台遺跡調査状況.....	41
第22図 第27次・第28次調査範囲とブロック位置図.....	43
第23図 第3文化層第26ブロック器種別分布.....	44
第24図 第3文化層第26ブロック母岩別分布.....	45
第25図 第3文化層第26ブロック出土石器.....	47
第26図 市野谷入台遺跡黒曜石产地推定結果.....	49
第5章 西初石五丁目遺跡	
第27図 西初石五丁目遺跡調査状況.....	56
第28図 第5地点器種別分布.....	58
第29図 第5地点母岩別分布.....	59
第30図 第5地点出土石器(1).....	61
第31図 第5地点出土石器(2).....	64
第32図 第5地点出土石器(3).....	65
第33図 第5地点出土石器(4).....	66
第34図 第5地点出土石器(5).....	67

表 目 次

第1章 はじめに	
第1表 市野谷中島遺跡発掘調査一覧.....	2
第2表 市野谷向山遺跡発掘調査一覧.....	2
第3表 市野谷入台遺跡発掘調査一覧.....	3
第4表 西初石五丁目遺跡発掘調査一覧.....	3
第2章 市野谷中島遺跡	
第5表 文化層ブロック別器種組成表.....	13
第6表 文化層ブロック別石材組成表.....	13
第7表 第1文化層第1ブロック組成表.....	15
第8表 単独出土石器組成表.....	18
第9表 市野谷中島遺跡石器属性表.....	21

第3章 市野谷向山遺跡	
第10表 文化層ブロック別器種組成表	22
第11表 文化層ブロック別石材組成表	22
第12表 第2文化層第9ブロック組成表（第1・7次）	25
第13表 第2文化層第9ブロック組成表（第7次）	25
第14表 第2文化層第10ブロック組成表（第1・7次）	30
第15表 第2文化層第10ブロック組成表（第7次）	30
第16表 市野谷向山遺跡石器属性表(1)	35
第17表 市野谷向山遺跡石器属性表(2)	36
第18表 市野谷向山遺跡石器属性表(3)	37
第19表 市野谷向山遺跡石器属性表(4)	38
第20表 市野谷向山遺跡石器属性表(5)	39
第4章 市野谷入台遺跡	
第21表 文化層ブロック別器種組成表	40
第22表 文化層ブロック別石材組成表	40
第23表 第3文化層第26ブロック組成表	46
第24表 市野谷入台遺跡石器属性表(1)	50
第25表 市野谷入台遺跡石器属性表(2)	51
第26表 市野谷入台遺跡石器属性表(3)	52
第27表 市野谷入台遺跡石器属性表(4)	53
第28表 市野谷入台遺跡石器属性表(5)	54
第5章 西初石五丁目遺跡	
第29表 文化層地点別器種組成表	55
第30表 文化層地点別石材組成表	55
第31表 第5地点組成表	57
第32表 西初石五丁目遺跡石器属性表(1)	68
第33表 西初石五丁目遺跡石器属性表(2)	69

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真（昭和22年撮影）	図版5 市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡 出土状況
図版2 遺跡周辺航空写真 [北側]（昭和48年撮影）	図版6 市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡 出土石器
図版3 遺跡周辺航空写真 [南側]（昭和48年撮影）	図版7 市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡 出土石器
図版4 市野谷中島遺跡 出土状況	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯

独立行政法人都市再生機構は、茨城県つくば市と都心を結ぶつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線整備計画に関連して、千葉県流山市市野谷から東初石・十夫地区一帯の土地区画整理事業を計画した。この事業は流山市新拠点構想として位置づけられ、施行にあたり、独立行政法人都市再生機構から区域内の「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会宛に提出された。区域内には、包蔵地14か所、野馬土手3か所が所在しており（第2図）、その取り扱いについて千葉県教育委員会との間で度重なる協議が行われた。その結果、事業区域内には山林・雑木林・畠地のほか既存の住宅地が点在していることから、住宅地や綠地など現状保存する区域を策定し、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、公益財團法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経緯と経過

今回報告する4遺跡の対象とする時代と調査次数は下記のとおりである。なお、下層は旧石器時代、上層は縄文時代以降を示す。

市野谷中島遺跡：下層	第1次～第8次調査
市野谷向山遺跡：下層	第7次調査
市野谷入台遺跡：下層	第27次・第28次調査
西初石五丁目遺跡：下層	第18次・第19次調査

発掘調査及び整理作業は、調査研究部調査1課及び調査研究部整理課がその任に当たったが、各遺跡の担当職員、作業内容等は下記のとおりである。

（1）市野谷中島遺跡

発掘調査は第1次から第8次調査を平成14年10月から平成16年3月にかけて断続的に行った（第1表、第8図）。下層（旧石器時代）の整理作業は、平成24年度に実施した。なお、上層については別途報告される予定である。

①発掘調査（第1表）

発掘調査完了面積は15,678m²で、344m²の下層の確認調査を実施した。なお、第3次・第6次調査において、確認調査を実施した際に石器が出土したので、確認グリッドを拡張して遺物の拡がりを確認したが、広範囲に拡がらなかったために確認調査の範囲で調査を終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境（第2～6図、図版1～3）

今回報告する4か所の遺跡が所在する流山市は、千葉県の北西部に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿つて南北に長い市域を形成している。江戸川に沿った市の西部は平坦な沖積低地であり、東部は高低差のある台地が広がっている。近年ではJR武蔵野線、東武野田線の在来線に加え、つくばエクスプレスの開通など都心からの利便性が高まり、急激な住宅都市化が進んでいる。4か所の遺跡は、このつくばエクスプレス線の流山おおたかの森駅の周辺に位置する。

第5図では周辺の旧地形と遺跡立地を把握するために、明治13・14年測量の迅速測図を用いて、低地（薄いスクリーントーン）と台地・微高地とを区分し、水系を示した。これらの区分に基づいて、第6図では平成17年発行の国土地理院の地形図に遺跡位置を示した。

2. 周辺の遺跡（第2～6図、図版1～3）

流山市から柏市にかけての地域では、大規模開発に伴って、1980年代以降、多くの旧石器時代遺跡が調査されており、現在までのところ、両市を合わせて100か所近くの遺跡が確認されている。

今回報告する4遺跡の周辺に分布する遺跡については、これまで流山新市街地地区の報告書が5冊刊行され、詳しく報告されているので参照していただきたい。ここでは、今回報告する遺跡が、旧石器時代のものであることから、周辺の旧石器時代の主な遺跡を概観する。

流山新市街地地区土地区画整理事業の遺跡群についてみてみよう。第2～4図によると、流山おおたかの森駅の北西部29Xグリッド付近（標高15m～16m）に坂川の源流とされる湧水地が所在する。そこから「牛飼沢」をとおり、38X・Y、39X・Yグリッド付近で蛇行して湿地帯を形成する。流路はさらに蛇行しながら大久保遺跡の北西から南西方向に続く。一方、市野谷二反田遺跡西側の4IRグリッド付近にも湧水地があり、湧き出た水は市野谷向山遺跡の北側の45Sグリッドあたりで北東からの流れと合流し氾濫原のような湿地帯を形成している。この坂川の源流域には、V層～IV層の時期に、多数の礫群と角錐状石器・ナイフ形石器を作った石器群が検出されている。この時期は最寒冷期で、海面が低下し、谷が最も深く刻まれた時期とされており、河川によって浸食され露出した遺跡近在の段丘礫層の礫を用いて礫群が形成されたことが推察される。

それでは、上述の坂川の源流域の遺跡群をみていくことにしよう。この地域には、事業地内では9遺跡所在し、濃密な旧石器時代遺跡群といえよう。今回報告するのは、このうち市野谷中島遺跡、市野谷向山遺跡、市野谷入台遺跡、西初石五丁目遺跡の4遺跡である。この他に、報告済みのものは、大久保遺跡、市野谷二反田遺跡、市野谷宮尻遺跡がある。未報告のものは、市野谷茅久保遺跡、市野谷立野遺跡である。これらの遺跡群を上述した順番に概要を記載する。

今回報告する市野谷中島遺跡は、V層～IV層下部に生活面を持つ第1文化層の石器群が1ブロック検出された。縦長剥片を素材とする角錐状石器とナイフ形石器が出土している。

市野谷向山遺跡は、第1次～第6次分については、既に報告されている（流山新市街地地区埋蔵文化財報告書5〔以下、流山新市街地報告書5と呼称する〕、報告書第670集、2012年刊行）が、今回第7次調査の成果として、第2文化層第9・10ブロックが追加されることとなった。なお、今回報告する第7次調査区域からは、既に報告した第1次調査区域の第2文化層の第9・10ブロックの拓がりが確認できたので、

母岩識別などを合わせて報告することとした。第1次～第6次の成果は、3枚の文化層に22か所のブロックが検出された。第1文化層は、IX層上部に生活面を持ち、第1～4ブロックの4か所のブロックで構成され、ナイフ形石器・削器が主要器種である。第2文化層は、VII層に生活面を持ち、第5～10ブロックの6か所のブロックで構成される。黒色頁岩と硬質頁岩を用いたナイフ形石器が主要器種である。第2文化層の石器群は、近年報告された鎌ヶ谷市東林跡遺跡VII層石器群と極めて類似する石器群として注目される。

市野谷入台遺跡は、第1次～第26次分については、既に報告されている（流山新市街地報告書3、報告書第606集、2008年刊行）が、今回第27次・第28次調査の成果として、V層～IV層下部に生活面を持つ第3文化層第26ブロックの成果が追加されることとなった。第1次～第26次の成果は、5枚の文化層に25か所のブロックが検出された。第1文化層は、VII層に生活面を持ち、3か所のブロックで構成される。第3ブロックからは、「下縦型石刃再生技法」による石器群が出土している。第2文化層はVI層に生活面を持ち、4か所のブロックで構成される。信州産の黒曜石を多用し、小型石刃を素材とした二側縁加工のナイフ形石器が出土している。第3文化層は、V層～IV層下部に生活面を持ち、14か所のブロックで構成される。ブロック群としては4か所識別できる。そのうち、大久保遺跡にもっとも近い第9～12ブロック群は、角錐状石器とナイフ形石器を主体とし、礫群を伴っていた。第4文化層は、V層～IV層下部に生活面を持ち、2か所のブロックで構成される。石材はすべて油脂状光沢を持った青緑灰色のチャートが用いられ、ナイフ形石器が製作されている。第5文化層は、III層上面に生活面を持ち、1か所のブロックで構成される。野岳・休場型の細石刃核を有する石器群である。今回の報告書では、第3文化層の石器群である第26ブロックが新たに追加され報告することとなった。

西初石五丁目遺跡は、第1次～第17次分については、既に報告されている（流山新市街地報告書2、報告書第596集、2008年刊行）が、今回第18次・第19次調査成果として、新たにIV層下部～IV層中部に生活面を持つ第5地点の石器群が追加されることとなった。第1次～第17次の成果は、IX層に1か所、IV層下部～IV層中部に2か所、III層に1か所のブロックが検出されている。

大久保遺跡は、3枚の文化層から41か所のブロックが検出された。第1文化層は、IX層下部に生活面を持ち、2か所のブロックで構成され、削器が主要器種である。第2a文化層は、IV層下部～IV層中部に生活面を持ち、18か所のブロックで構成され、多量のナイフ形石器と角錐状石器に礫群が伴っている。ブロック間接合が頻繁にみられ、最長で約80m離れて接合した資料もみられた。第2b文化層は、IV層下部～IV層中部に生活面を持ち、21か所のブロックで構成される。ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器が主要器種である。なお、第2a文化層と第2b文化層との先後関係については明確ではない。

市野谷二反田遺跡は大久保遺跡の南西側、市野谷向山遺跡の北側に隣接する。3枚の文化層から12か所のブロックが検出された。第2文化層は、VII層上部～VI層下部に生活面を持ち、2か所のブロックで構成される。第2ブロックからは、和田エリアの黒曜石を用いた下縦型石刃再生技法による石器群が出土している。第3文化層第6～11ブロックは、V層～IV層下部に生活面を持ち、ナイフ形石器を主体とし礫群を伴う。第3文化層第12ブロックは、市野谷入台遺跡第4文化層の石器群と類似した石器群が出土している。なお、第4・5ブロックは、報告書刊行後に出土層位などを検討した結果、IX層出土の石器群であると捉えている。高原山の黒曜石を多用し、小型の二側縁加工のナイフ形石器が多く出土している。

市野谷宮尻遺跡では、槍先形尖頭器が1点出土している。

未報告（年報・抄録に概要記載）ではあるが、市野谷芋久保遺跡では、IX層から18か所のブロックで構成された環状ブロック群が検出されており、台形様石器・ナイフ形石器・局部磨製石斧が伴っている。その他にVII層とV層～IV層下部の石器群など複数の文化層から良好な石器群が出土している。

同じく未報告であるが、市野谷立野遺跡では、V層～IV層下部にかけてナイフ形石器・角錐状石器を主体として、多量の礫群が伴って出土している。

大堀川の源流域の遺跡群としては、東初石六丁目第Ⅰ遺跡、東初石六丁目第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅱ遺跡と未報告の十太夫第Ⅲ遺跡の計4遺跡が事業地内に所在する。

東初石六丁目第Ⅰ遺跡は、3か所のブロックが検出された。文化層はV層～IV層下部に生活面を持つ第1文化層が検出された。製品の出土点数が少なく、二次加工のある剥片が2点出土している。

東初石六丁目第Ⅱ遺跡は、5か所のブロックが検出された。文化層はV層～IV層下部に生活面を持つ第1文化層が検出された。ナイフ形石器と角錐状石器が主体を占め、礫群を伴う。

十太夫第Ⅱ遺跡は、1か所のブロックが検出された。V層からVII層上部にかけて遺物が出土した。製品の出土点数が少なく、二次加工のある剥片が出土している。

十太夫第Ⅲ遺跡では、IX層から1点出土している。

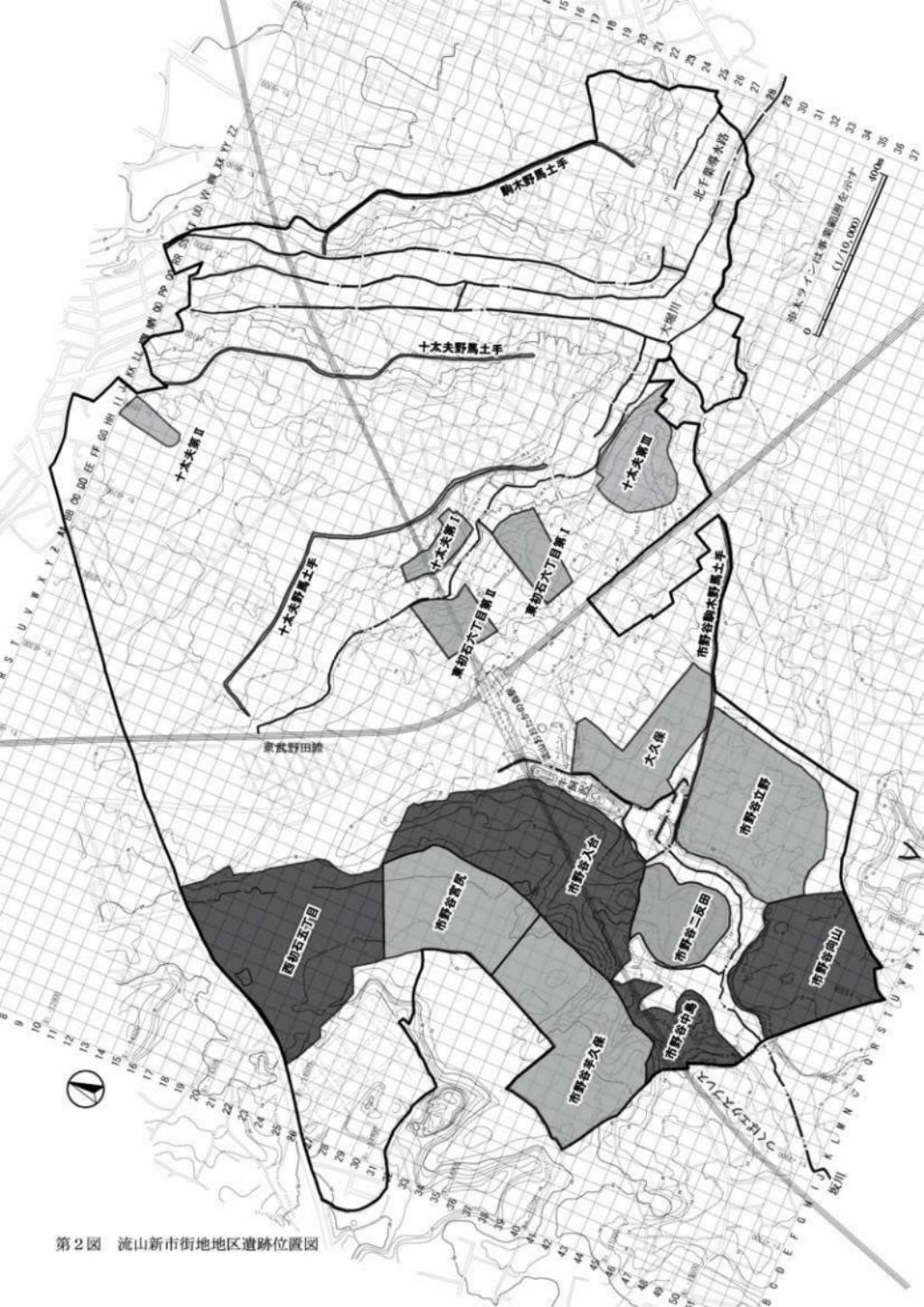
以上のように、大堀川の源流域の遺跡群は、ナイフ形石器・角錐状石器を主体として礫群を伴っている石器群が出土しており、上述の坂川の源流域の遺跡群で出土している石器群と類似した内容を持つ。

事業地周辺の遺跡については、石器群がまとまって出土しているものは若葉台遺跡があげられる。若葉台遺跡では、7か所のブロックで構成される。VI層上部（第6ブロック）→V層（第3ブロック）→IV層下部（第1・2・4・5ブロック）の近接した層位の石器群の変遷過程が把握されている。今回報告する遺跡群の変遷を解明する上で重要な石器群といえよう。

その他に、周辺の遺跡としては、北東部の常磐自動車道柏地区・柏北部東地区・柏北部中央地区において、中山新田I遺跡・大松遺跡・原山遺跡・農協前遺跡などの大規模な旧石器時代の遺跡群が所在する。

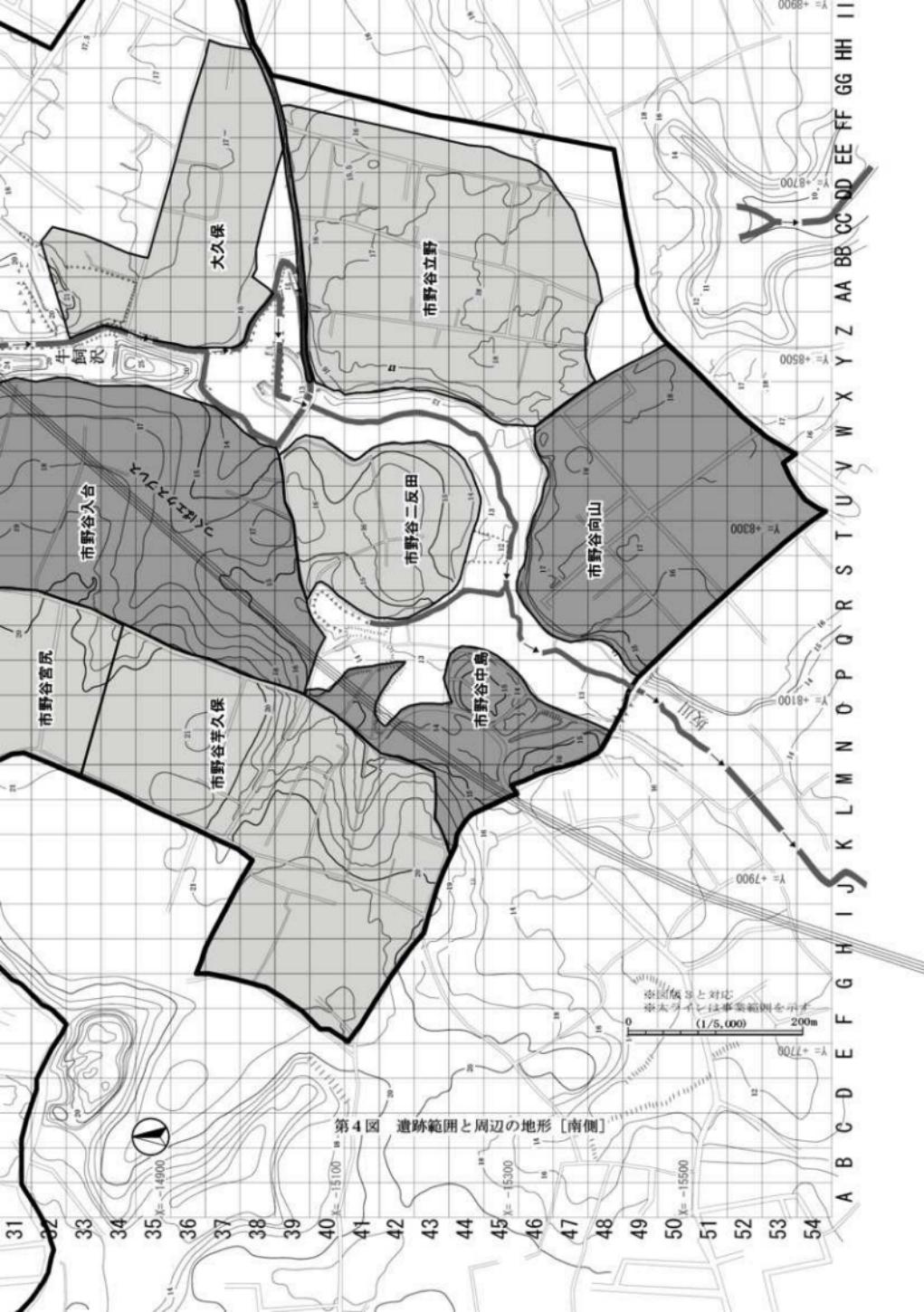
参考文献

- (財) 千葉県文化財センター 1986年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V—谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)』
(財) 千葉県教育振興財團 2006年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1—流山市市野谷宮尻遺跡—』
(財) 千葉県教育振興財團 2008年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書2—流山市西初石五丁目遺跡—』
(財) 千葉県教育振興財團 2008年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3—流山市市野谷入台遺跡—』
(財) 千葉県教育振興財團 2009年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書4—流山市市野谷二反田遺跡—』
(財) 千葉県教育振興財團 2011年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5—流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡—』
(財) 千葉県教育振興財團 2009年『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書2—柏市原山遺跡— 旧石器時代編』
(財) 千葉県教育振興財團 2011年『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書3—柏市農協前遺跡— 旧石器時代編』



第2図 流山新市街地地区遺跡位置図





第4図 遺跡範囲と周辺の地形〔南側〕



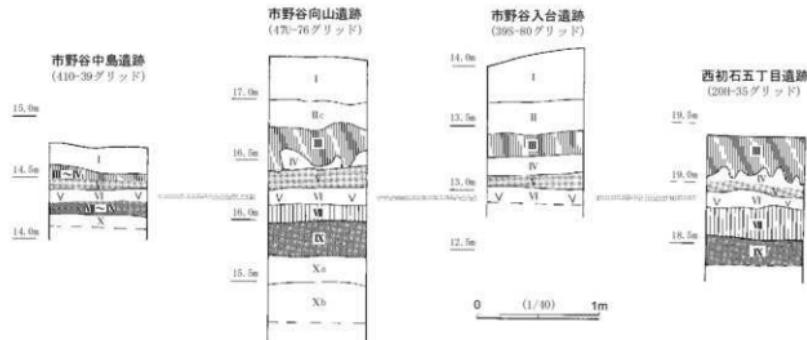
第5図 旧石器時代遺跡分布と周辺の地形（旧況図）



第3節 基本層序 (第7図)

基本層序は、第7図のとおりである。IX層とX層については、細分できない遺跡も多くみられた。基本層序については、この地域で細分可能な標準土層の特徴を記載した。

- I 層 黒色の表土である。
- II a層 黒褐色土である。
- II b層 明褐色土である。いわゆる「新期テフラ層」である。
- II c層 暗褐色土である。
- III 層 明黄褐色ローム土である。立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。下部に向かってソフト化が進行している。赤色スコリアを少量含む。
- IV 層 明褐色ローム土である。硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。2mm～3mm大の赤色スコリアを多く含み、全体に赤みを帯びて明色である。
- V 層 黄褐色ローム土である。第1黒色帶に相当する。IV層に比べて、赤色スコリアの量が少なく、全体に黒ずんでいる。IV層とV層とを明確に区分できる遺跡は少なかった。
- VI 層 明黄褐色ローム土。A T (姶良丹沢火山灰) がブロック状に含まれる。
- VII 層 褐色ローム土。第2黒色帶上部に相当する。全体に黒ずんでいる。1mm～2mm大の黄色スコリアと1mm大の赤色スコリアが少量含まれる。
- IX a層 暗褐色ローム土。第2黒色帶下部の上半である。IX層を細分できた遺跡もあるが、細分できなかつた遺跡も多い。VII層よりも黒ずんでいる。2mm～3mm大の赤色スコリアが多く含まれる。
- IX b層 暗褐色ローム土。第2黒色帶下部の間層である。ほとんどの遺跡で、この層はみられなかつた。
- IX c層 暗黄褐色ローム土。第2黒色帶下部の下半である。2mm大の赤色スコリアが微量含まれる。
- X a層 暗黄褐色ローム土。スコリア粒がほとんど含まれない。X層を細分できる遺跡は少なかつた。
- X b層 黄褐色ローム土。X a層よりも若干暗い。上下の層に比べて、スコリアの量が少なくなる。
- X c層 暗黄褐色ローム土。スコリア粒がほとんど含まれない。
- XI 層 灰褐色ローム土。武蔵野ローム最上層である。粘性を帯びた灰褐色ロームである。



第7図 基本層序

第2章 市野谷中島遺跡

第1節 遺跡の概要（第8図、第5・6表）

旧石器時代の確認調査範囲と文化層別ブロック位置図は第8図のとおりである。遺物分布状況は、ドットで示した。文化層は第1文化層のみ検出された。文化層・ブロック別の器種組成・石材組成は、第5・6表のとおりである。石器の出土総数19点で、1か所のブロックと1か所の単独出土地点が検出された。

第2節 第1文化層

1. 概要（第8図）

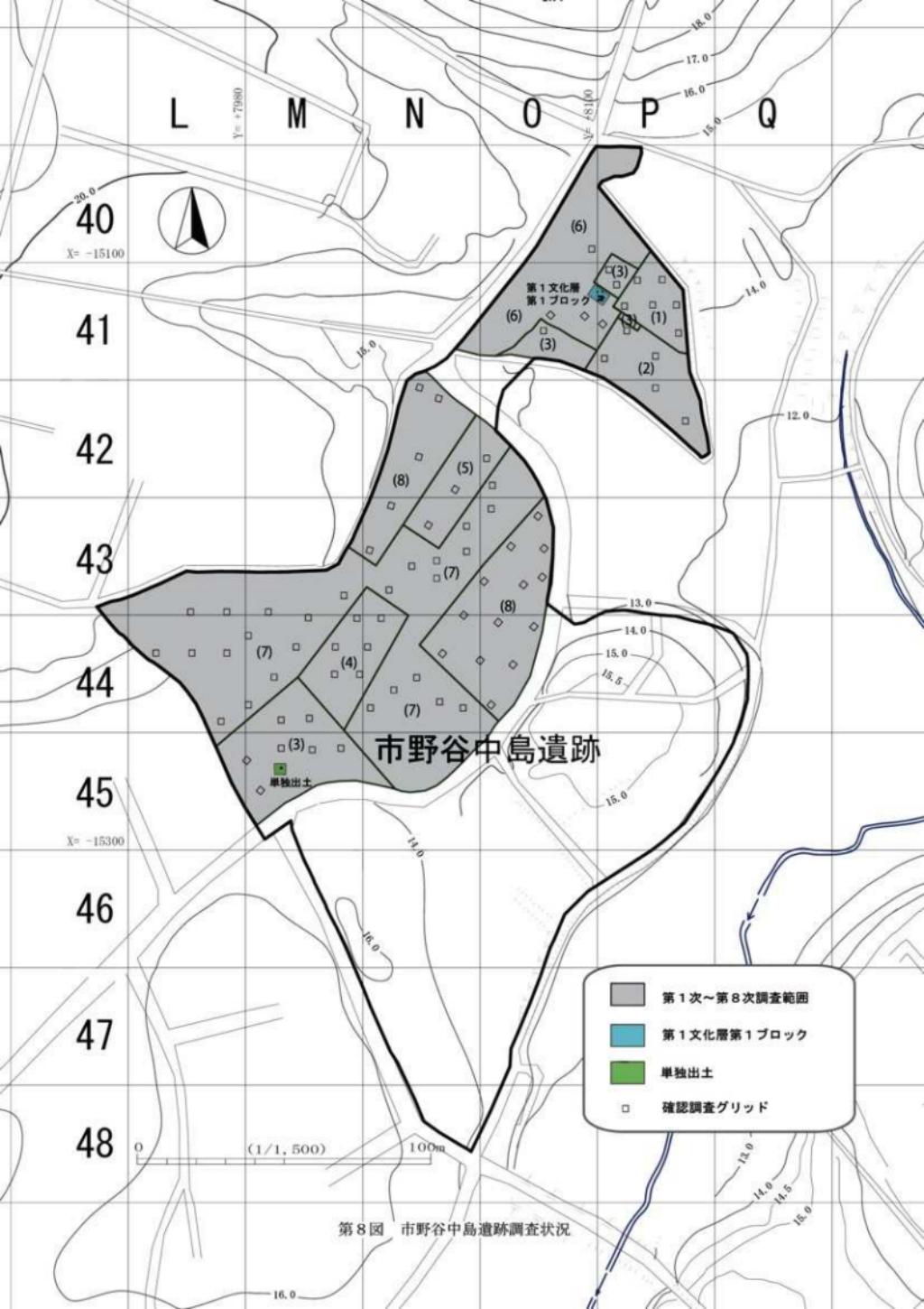
第1文化層の石器群は、総計18点出土し、第1ブロックの1か所識別できた。調査区北東部の標高14m～15m（現地表面）にかけて分布する。V層～IV層下部に生活面を持つ石器群と推定される。

第5表 文化層ブロック別器種組成表

文 化 層	ブ ロ ク 類	角 質 石 器	ナ イ フ 石 器	二 次 加 工 の あ る 削 片	器 種			直 接 合 計	直 接 合 計	重 量 合 計	重 量 合 計
					片	核	块				
1	1	1	1	2	10	1	2	1	18	94.74	208.56
単位	單物				1			1	3.26	3.50	1.65
総計点数		1	1	2	11	1	2	1	19	100.00	212.46
点数組成比(%)		52.6	52.6	10.53	57.89	52.6	10.53	52.6	100.00		100.00

第6表 文化層ブロック別石材組成表

文 化 層	ブ ロ ク 類	ガ ラ ス 青 白 黒 色 安 山 岩	波 紋 状	材 料			直 接 合 計	直 接 合 計	重 量 合 計	重 量 合 計
				黑	砂	チ ケ 石 岩				
1	1		2	11	1	4	18	94.74	208.56	98.35
単位	單物	1					1	5.26	3.50	1.65
総計点数		1	2	11	1	4	19	100.00	212.46	100.00
点数組成比(%)		52.6	10.53	57.89	52.6	21.05	100.00			



2. 第1プロック (第9・10図、第7・9表、図版4・6)

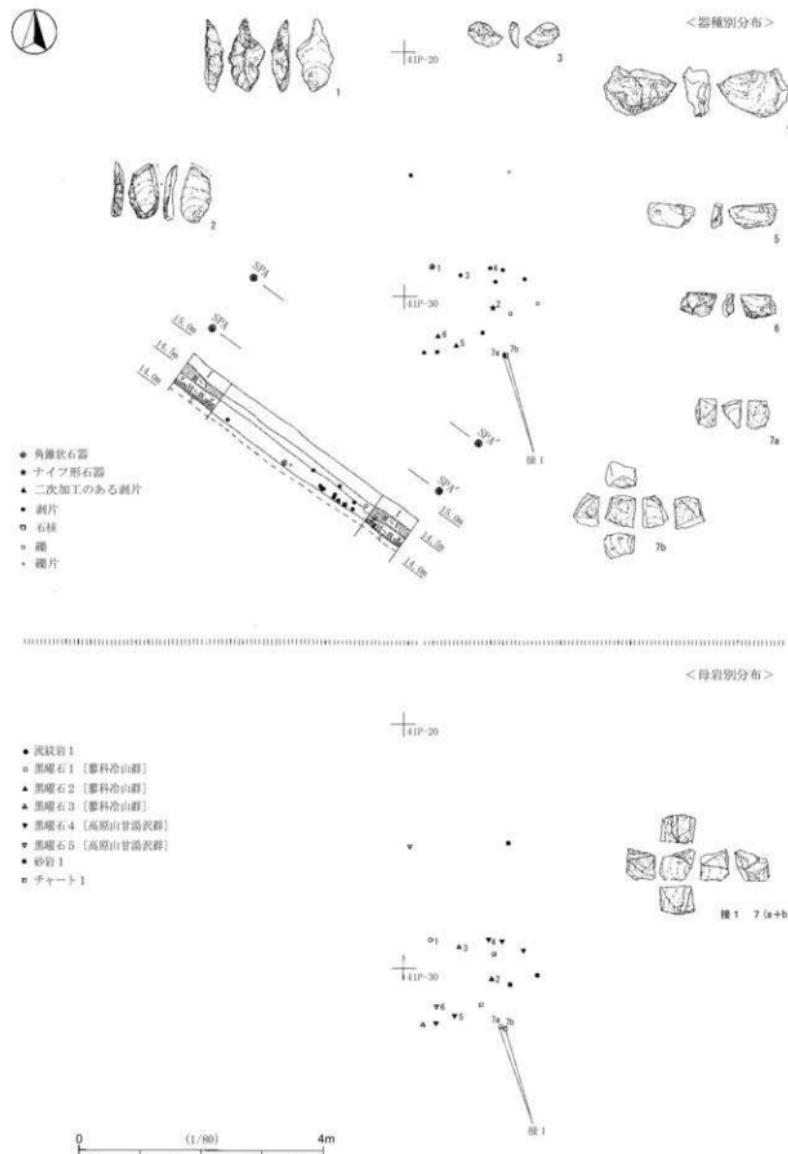
出土状況 調査区北東部の41P-20・30グリッドに分布している。今回調査を実施した調査範囲のなかでは最も標高の高い地点に遺物が分布している。3.2m×2.1mの範囲に密集して、18点の石器が出土した。分布を詳細にみると、礫・礫片が3点出土しているが、いずれも東側に分布している。石材組成で主体を占める黒曜石が中心部に分布する傾向がみられる。出土層位は、VI層からIII層にかけて出土しており、III～V層と表記したソフトロームの下部に集中することから、V層～IV層下部に生活面を持つ石器群と推定される。

出土遺物 器種組成は、角錐状石器1点、ナイフ形石器1点、二次加工のある剥片2点、剥片10点、石核1点、礫2点、礫片1点である。出土点数が少ないものの、製品の割合が比較的高い。石材組成は、黒曜石11点、チャート4点、流紋岩2点、砂岩1点である。黒曜石の割合が約1%で極めて高い。黒曜石产地推定地の内訳は、高原山甘湯沢群7点、蓼科冷山群4点である。

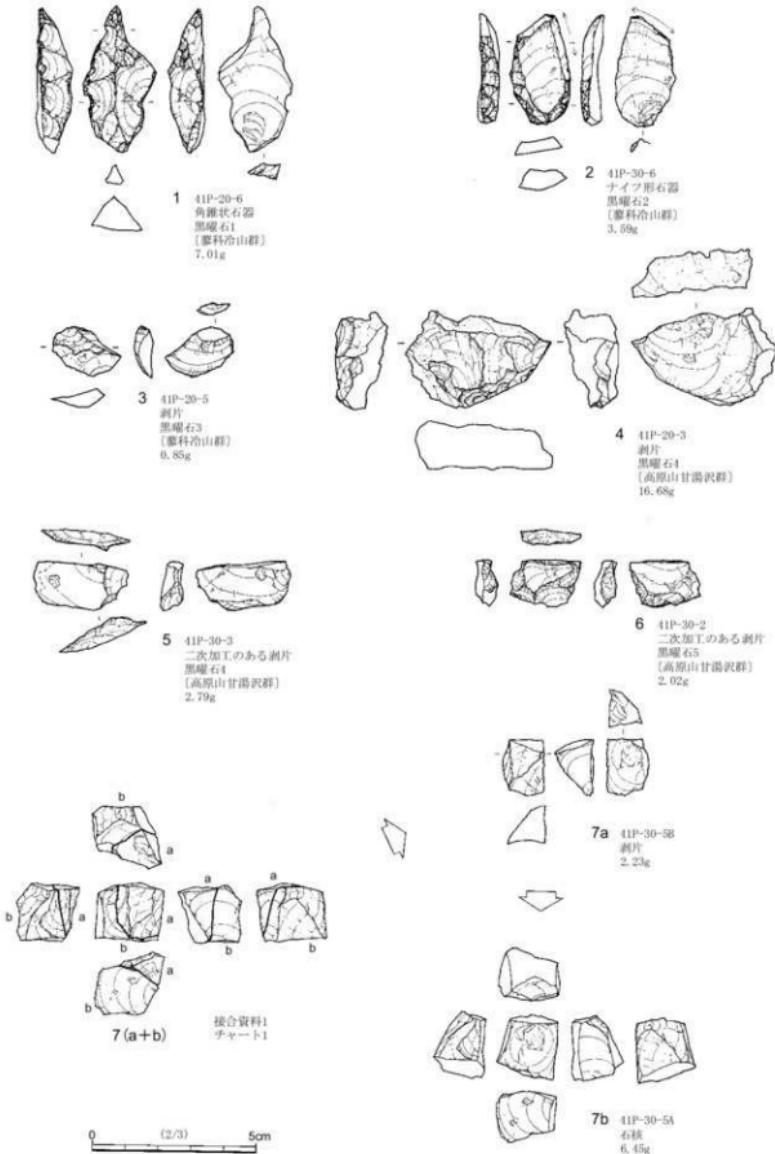
1は角錐状石器である。厚みのある縦長剥片を素材として、急角度の粗い鋸歯状の調整加工が全周に施された後に、先端部右側に中央部から腹面方向に稜状の調整加工が入念に施されている。先端部は錐状の形状を呈する。2はナイフ形石器である。縦長剥片を素材として、左側縁と右側縁下部にプランティング加工が施されている。素材の縁辺部には微細剝離痕が観察される。素材の打面はわずかに残存している。1・2とともに、良質の蓼科冷山群の黒曜石が用いられており、それぞれ単独母岩であり、製品として遺跡に搬入されている。3は蓼科冷山群の黒曜石を用いた剥片である。頭部調整は行われているが、打面調整は行われていない。4・5は高原山甘湯沢群の黒曜石4が用いられている。黒曜石4は赤茶色不透明の地上墨を流したような黒色の縞があり、紙やすり状の自然面・節理面を持つ。通常、関東地方で出土する黒曜石の色調や形状と異なる。4は剥片である。幅広の自然面の打面から横長剥片が剥離されている。5は二次加工のある剥片である。幅広の剥片を素材として、上下両端部を折断して成形した後に、右側面に粗い調整加工が施されている。6は高原山甘湯沢群の黒曜石5が用いられている。黒曜石5は極端に透明の良質なガラス質である。幅広の剥片を素材として、上下両端を折断して成形した後に、両側縁に粗い調整加工が施されている。5と類似した石器製作技術が用いられている。7(a+b)は剥片と石核の接合資料である。厚みのある分割剥片を素材として、打面転移を頻繁に繰り返しながら、7aの幅広剥片などを剥離している。7bの石核はサイコロ状の形態を呈する。

第7表 第1文化層第1プロック組成表

石器種類	荷造番号	黒曜石产地推定地	角錐状石器	ナイフ形石器	二次加工の 核心部位	剥片	石核	縁	縁片	直角剥片	直角比率	直角合計	直角比率 (%)
式 級 石	1							1	1	2	11.11	43.83	20.98
基 本 石	1	蓼科冷山群	1							1	3.56	7.01	3.55
	2	蓼科冷山群		1						1	3.56	3.56	1.72
	3	蓼科冷山群			2					2	11.11	0.39	0.47
	4	高原山甘湯沢群			1	4				5	27.78	24.00	11.82
	5	高原山甘湯沢群			1	1				2	11.11	2.88	1.22
基 本 石 合 計			1	1	2	7				11	61.11	38.89	18.95
砂 積 石	1									1	5.56	11.88	5.55
チ ャ ー ト	1									4	22.22	11.56	5.55
全 体 点 数 合 計			1	1	2	10	1	2	1	16	100.00	258.95	100.00
全 体 組 成 比 (%)			5.56	5.56	11.11	35.56	5.56	11.11	5.56	19.00			



第9図 第1文化層第1ブロック遺物分布



第10図 第1文化層第1ブロック出土石器

第3節 単独出土石器

1. 概要 (第8図)

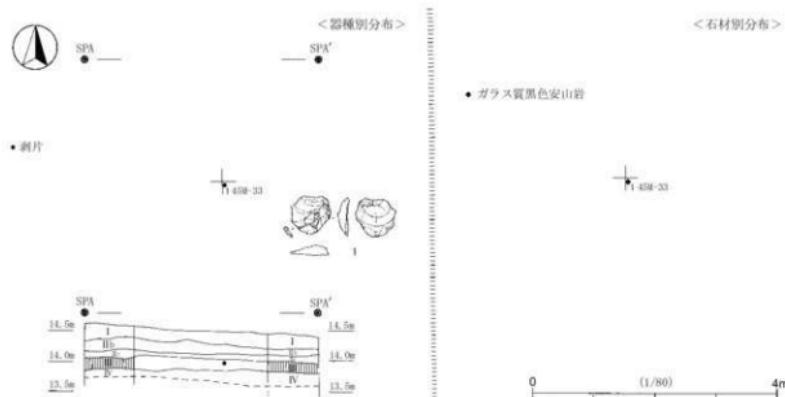
単独出土石器は、調査区南西部の標高14.5m（現地表面）に出土した。1点のみの出土であり、石器群の内容が明確でないため、単独出土石器として扱うこととする。

2. 単独出土石器 (第11・12図、第8・9表)

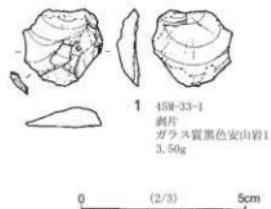
45M-33グリッドから出土した。出土層位はⅢ層上部である。1はガラス質黒色安山岩を用いた剥片である。線状の打面から剥離された横長剥片である。第1文化層第1ブロックとの関連については、単独出土石器の方が出土層位が上位から出土していることから、第1文化層に帰属しない石器と判断した。

第8表 単独出土石器組成表

品種	母岩番号	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	I	1	1	100.00	3.50	100.00
全 体 点 数 合 計		1	1	100.00	3.50	100.00
点数組成比 (%)		100.00	100.00			



第11図 単独出土遺物分布



第12図 単独出土石器

第4節 黒曜石の産地推定結果について

黒曜石の産地同定は明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に分析を依頼した。

1. 分析方法

蛍光X線分析より得られた元素の強度を用いて以下の2つの方法により産地を決定している。

①判別図法 [図による産地推定] (第13図下)

蛍光X線分析法により得られた各元素の蛍光X線強度から下記の4つの指標を計算する。

$$\text{指標1} \quad \text{Rb 分率} = \text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$\text{指標2} \quad \text{Mn 強度} \times 100 / \text{Fe 強度}$$

$$\text{指標3} \quad \text{Sr 分率} = \text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$\text{指標4} \quad \log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$$

指標1・2と指標3・4をそれぞれX軸とY軸とした2つの判別図を作成し、原産地黒曜石の散布域と遺跡出土黒曜石の照合によって産地を決定する。

②判別分析 [多変量解析による産地推定] (第13図左中表)

判別図法による産地推定結果を検証するために、多変量解析の一手法である判別分析を行っている。判別分析では遺跡出土の資料1点ごとに、各原産地との距離（マハラノビス距離と呼ばれる）を計算し、資料との距離がもっとも小さい産地がその資料の産地であると推定される。またそれぞれの産地とのマハラノビス距離から、資料が各原産地に属する確率も計算され、その数値が1に近いほど推定結果の信頼性が高くなる。

2. 分析結果 (第13図)

分析結果は、第13図のとおりである。市野谷中島遺跡の第1文化層第1ブロック出土黒曜石11点のうち、特徴的な石器9点を分析対象とした。9点の分析番号は、IN-XR001～IN-XR009である。分析資料の遺物属性は左上の表、元素の組成・産地の候補地についてはその下の表に記載した。

測定不可と判別された2点の資料 (IN-XR005・IN-XR009) については、候補1では高原山甘湯沢群との推定結果が出ていた（第13図左中表）。また肉眼観察によると IN-XR005が黒曜石5、IN-XR009が黒曜石4に極似しており、肉眼観察で黒曜石5と識別したIN-XR007が高原山甘湯沢群、黒曜石4と識別したIN-XR001・002も同じく高原山甘湯沢群と判別されていた。これらのことから、2点の測定不可の資料については、第2章第1節においては、高原山甘湯沢群のものとして取り扱った。

また、分析対象としなかった2点の資料についても、肉眼観察により黒曜石4と識別できたため、上述と同様の判断から、高原山甘湯沢群と判別した。これらの成果は、第7表の第1文化層第1ブロック組成表と第9表の市野谷中島遺跡石器属性表に掲載してあるので併せて参照していただきたい。

分析結果をまとめると、第1文化層第1ブロックから出土した11点の黒曜石の推定産地組成は、高原山甘湯沢群7点、蓼科冷山群4点という結果となった。

高原山甘湯沢群と判別された黒曜石4は、5点出土しており、赤茶色不透明の地に墨を流したような黒色の縞があり、紙やすり状の自然面・節理面を持つ。関東地方で通常出土しない黒曜石の色調をしていた。7点出土した高原山甘湯沢群の黒曜石は製品がみられない。それに対して、4点出土した蓼科冷山群の黒曜石は角錐状石器1点、ナイフ形石器1点であった。出土点数が少ないので明確なことはいえないが、良質である蓼科冷山群の黒曜石は製品として持ち込まれ、あまり良質でない高原山甘湯沢群の黒曜石は原

判別図法・判別分析からの最終結果

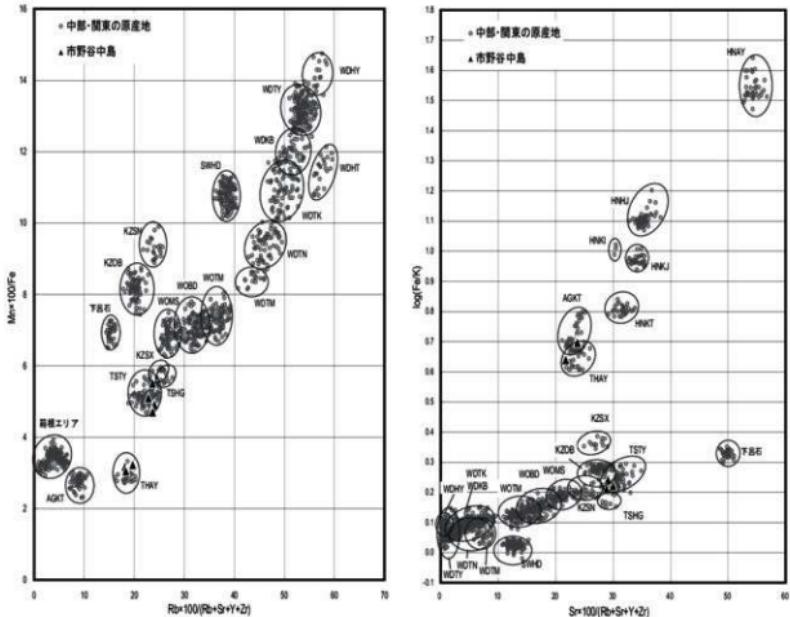
分析番号	文化層	ブロック	検査番号	グリッド	遺物番号	基準	重量	推定产地
IN-XR001	1	1	41P-20	0002	剥片		3.29	高原山甘溝沢群
IN-XR002	1	1	41P-20	0003	剥片		16.68	高原山甘溝沢群
IN-XR003	1	1	3	41P-20	0005	剥片		0.85 麦科冷山群
IN-XR004	1	1	1	41P-20	0006	角状石器	7.01	麦科冷山群
IN-XR005	1	1	1	41P-20	0007	剥片	0.56	測定不可
IN-XR006	1	1	1	41P-30	0001	剥片	0.14	麥科冷山群
IN-XR007	1	1	6	41P-30	0002	二次加工のある剥片	2.02	高原山甘溝沢群
IN-XR008	1	1	2	41P-30	0006	ナフロ石器	3.59	麥科冷山群
IN-XR009	1	1	1	41P-30	0009	二次加工のある剥片	1.82	測定不可

黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%
麥科	冷山	TSTY	4	57.1
高原山	甘溝沢	THAY	3	42.9
	合計		7	100.0

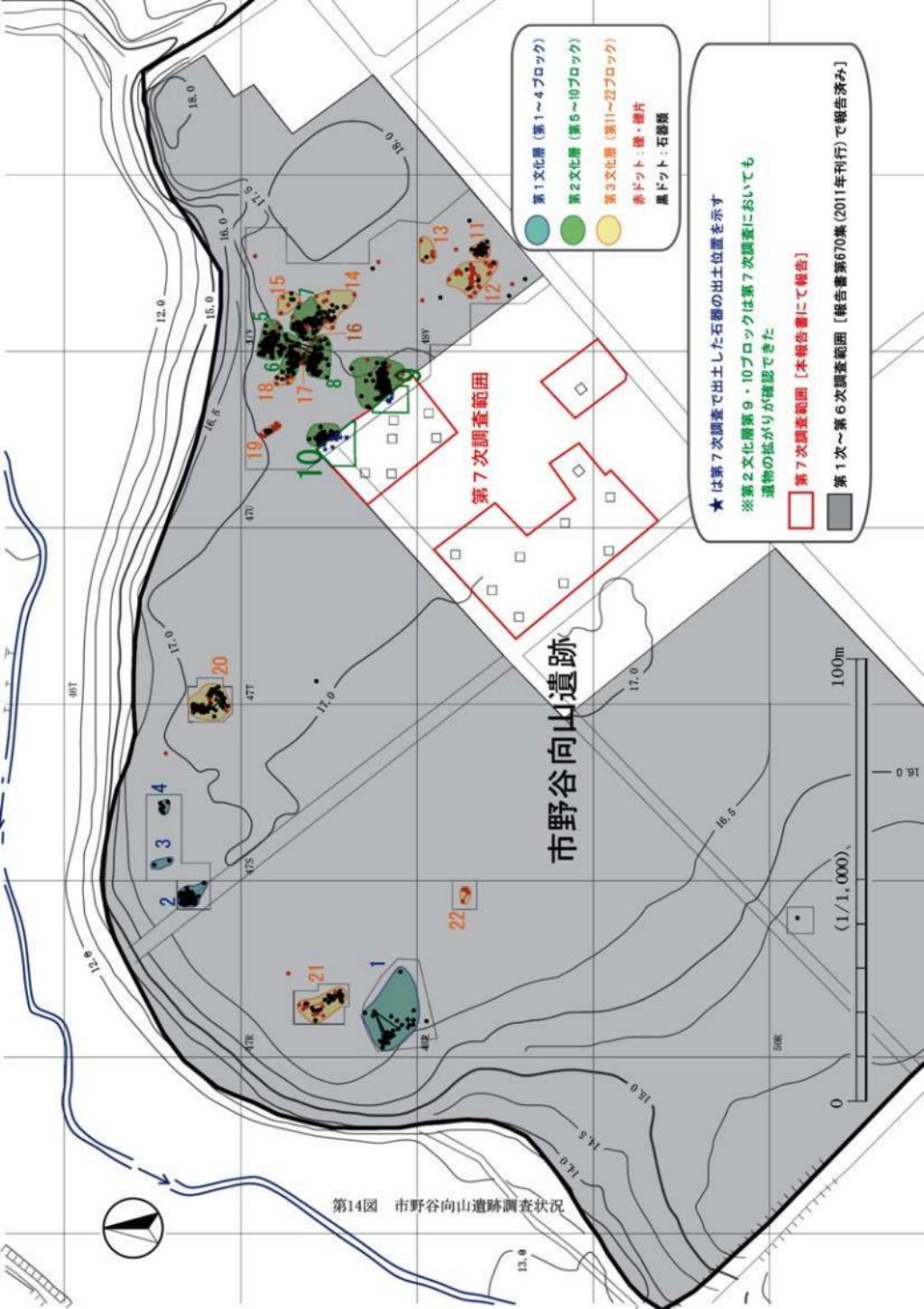
判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

分析番号	推定产地	判別分析						Rb/S	Mn/Fe	Sr/S	Fe/K
		候補1	距離1	確率1	候補2	距離2	確率2				
IN-XR001	THAY	THAY	5.59	1.00	AGKT	133.51	0.00	19.68	3.23	21.75	4.37
IN-XR002	THAY	THAY	4.22	1.00	AGKT	103.93	0.00	18.15	3.18	23.76	5.08
IN-XR003	TSTY	TSTY	8.21	0.98	KZSX	11.62	0.02	23.62	5.52	29.97	1.67
IN-XR004	TSTY	TSTY	4.68	1.00	KZSX	10.94	0.00	22.83	5.11	28.51	1.63
IN-XR005	不可	THAY	12.85	1.00	AGKT	124.47	0.00	18.78	2.75	23.50	6.38
IN-XR006	TSTY	TSTY	2.94	1.00	KZSX	12.77	0.00	24.02	4.92	29.09	1.75
IN-XR007	THAY	THAY	1.67	1.00	AGKT	114.94	0.00	18.30	3.06	23.79	4.98
IN-XR008	TSTY	TSTY	8.17	1.00	TSHG	17.58	0.00	23.66	4.71	28.88	1.63
IN-XR009	不可	THAY	58.01	1.00	AGKT	83.94	0.00	17.76	2.28	19.60	7.32



市野谷中島遺跡出土黒曜石产地判別図

第13図 市野谷中島遺跡黒曜石产地推定結果



第2節 第2文化層

1. 概要（第14図、第10・11表）

前述のとおり、第7次調査においては、報告書第670集（2011年刊行）すでに報告した第1次～第6次調査区域で検出された第2文化層第9ブロックと第10ブロックの遺物の拡がりが確認できた。そのため、本報告においては、第7次調査成果と前回報告した第1次調査成果を合わせて報告することとした。

第1次調査分と第7次調査分の各ブロックの出土点数の内訳は、第10・11表のとおりである。第7次調査分としての石器総数は21点で、その内訳は第9ブロックが5点、第10ブロックが16点である。

第2文化層は、VII層に生活面を持つ。遺跡北東部の47U・47Vグリッドに分布し、第5～10ブロックの6か所のブロックで構成される。前回報告分が716点で今回追加された資料が21点なので、第2文化層の出土総点数は、737点ということになった。

器種組成は、ナイフ形石器19点、彫器2点、削片2点、楔形石器8点、搔器1点、削器2点、二次加工のある剥片36点、微細剥離痕のある剥片21点、石刃3点、敲石17点、石核8点、剥片373点、碎片179点、礫5点、礫片61点である。

石材組成は、ガラス質黒色安山岩229点、黒色頁岩226点、硬質頁岩98点、砂岩62点、ホルンフェルス51点、チャート28点、トロトロ石18点、流紋岩11点、黒曜石9点、珪質頁岩4点、玉髓1点である。

黒色頁岩と硬質頁岩を用いたナイフ形石器が本文化層を特徴づける主要な器種である。これらのナイフ形石器は、石刃を素材としており、すべてのものが搬入品であった。今回の調査区域では黒曜石は出土していないが、第1次調査区域からは9点の黒曜石が出土しており、すべて高原山甘湯沢群のものであった。

類似する石器群としては、近年報告された鎌ヶ谷市東林跡遺跡第VII層石器群と極めて類似する石器群として注目される。

2. 第9ブロック（第15～17図、第10～13・16～18表、図版5・6）

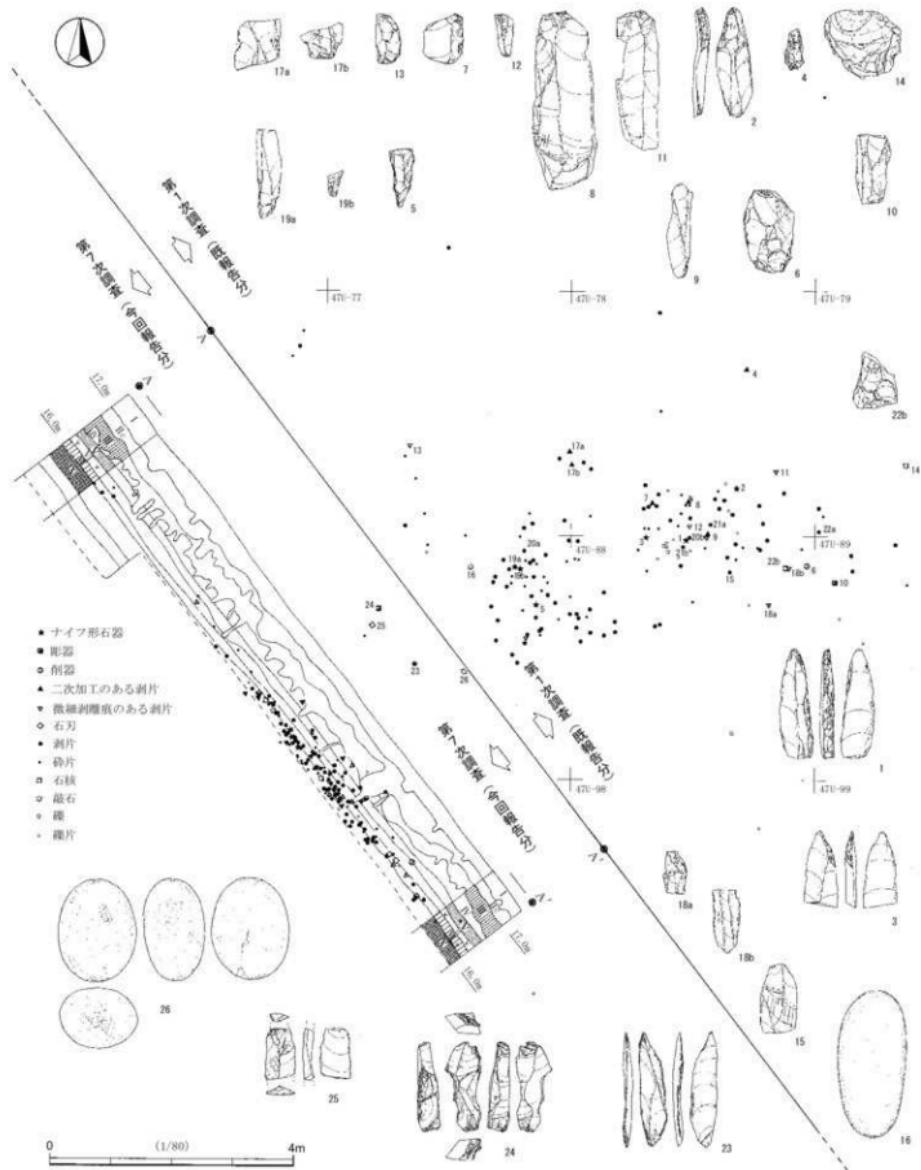
出土状況 遺跡北東部の47U-67・76～79・87～89・98グリッドに分布する。北西に約10m離れて第10ブロックが分布する。北東部側が第1次調査（既報告分）で南西部側が第7次調査（今回報告分）となる。第7次調査は47U-87グリッドから5点の石器が出土している。

第9ブロック全体としては、12m×10.4mの範囲に176点の石器が出土した。第2文化層の中で最も出土点数の多いブロックである。

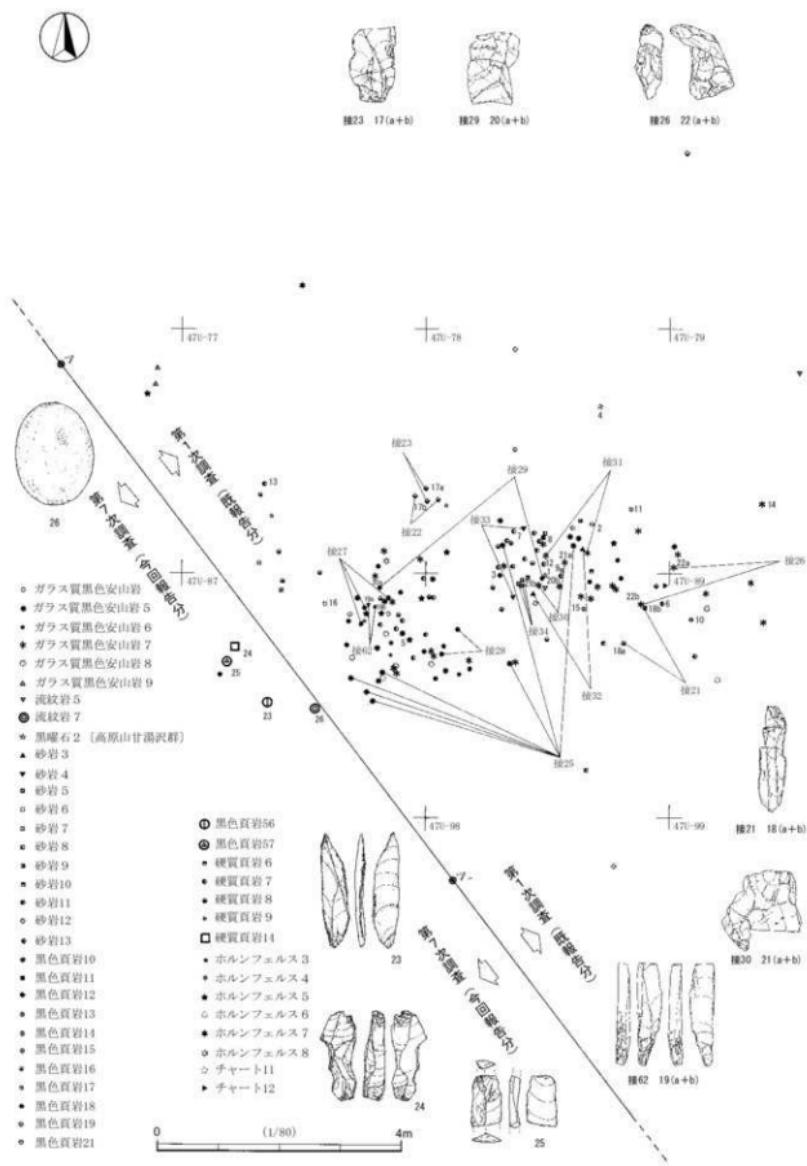
出土層位は、IX層上部～IV層下部にかけて分布し、VII層に集中する。今回出土した5点の石器はVII層から出土している。第9ブロック全体の分布を詳細にみると、東西に楕円形に分布しており、西部・中央部・東部の3か所の集中地点がみられ、その周辺に散漫に分布している。中央部の集中地点（47U-78・88グリッド）から、1～3のナイフ形石器などの製品がまとまって出土する傾向がみられた。

今回の第7次調査区域である西部の集中地点（47U-87グリッド）の西側から、23のナイフ形石器と24の彫器の製品や16・26の敲石がまとまって出土する傾向が捉えられた。今回出土した5点の石器との接合する資料はみられなかった。

出土遺物 器種組成は、今回調査分が、ナイフ形石器1点、彫器1点、石刃1点、碎片1点、敲石1点である。第9ブロック全体では、ナイフ形石器7点、彫器2点、削器1点、二次加工のある剥片6点、微細剥離痕のある剥片7点、石刃1点、剥片76点、碎片53点、石核2点、敲石2点、礫3点、礫片16点で、石



第15図 第2文化層第9ブロック器種別分布



第16図 第2文化層第9ブロック母岩別分布

器類157点と礫・礫片類19点で構成される。石材組成は、今回調査分が、黒色頁岩2点、硬質頁岩1点、ガラス質黒色安山岩1点、流紋岩1点である。第9ブロック全体では、石器石材は、ガラス質黒色安山岩76点、硬質頁岩37点、黒色頁岩25点、ホルンフェルス14点、砂岩2点、黒曜石1点、チャート1点、流紋岩1点である。黒曜石は1点のみの出土ではあるが、第2文化層の他のブロックと同様に高原山甘湯沢群のものであった。礫石材は砂岩15点、流紋岩2点、ホルンフェルス1点、チャート1点である。

出土石器の挿図番号については、報告書第670集（2011年刊行）の第2文化層第9ブロックに1～22を掲載したので、今回報告の第7次調査分については、その続きの23～26をつけることとした。

23はナイフ形石器である。黒色頁岩が用いられている。石刃を素材として、打面部を基部として用いている。左側縁の上部と下部、右側縁の中部から下部にかけてプランティング加工が施されている。素材石刃の打瘤部分は、左側縁下部から腹面方向の調整加工によって除去されている。このナイフ形石器の製作技術は、既報告分の第9ブロック1～3・5のナイフ形石器と類似している。ナイフ形石器はすべて製品として搬入されている。

24は彫器である。硬質頁岩が用いられている。大型の石刃を素材としている。最初の調整加工は、左側縁中部から下部にかけて、粗い調整加工を行ない、さらに急角度の細かい調整加工が施されている。次に、右側縁上部の小口面から器体の下部まで及ぶ長い樋状剥離が2回行われている。

さらに、右側縁上部から剥離面の短い3回目の樋状剥離が行われ、最後に右側縁下部から剥離面の短い樋状剥離が3回以上行われている。右側縁下部からの樋状剥離面は、先に記載した左側縁の調整剥離面との切り合い関係がみられ、右側縁下部からの樋状剥離面が新しいことが観察される。

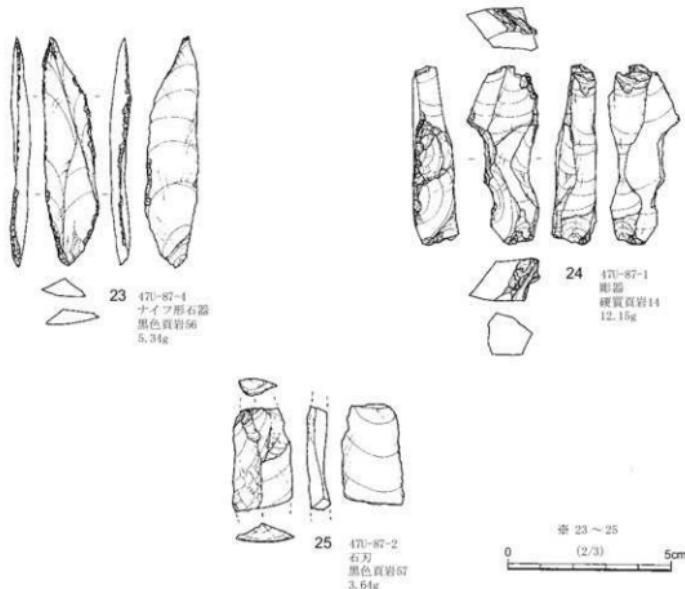
なお、右側縁上部からの器体下部まで及ぶ2回の樋状剥離面は、左側縁の調整加工との切り合い関係は明確ではないが、右側縁下部の樋状剥離が最終剥離面であることから、左側縁の調整加工よりも新しいと判断した。また、石刃の素材背面は、表面の上部と下部中央部、素材腹面は、裏面右側にそれぞれ残存している。

このように、24の石器については、大型の石刃を素材として、4回以上の樋状剥離が行われ、通常の彫器とは形態や樋状剥離方法が異なっていた。下縦型石刃再生技法に伴う有樋石刃として器種識別したほうが適当かもしれない。既報告分の第9ブロック10の黒色頁岩を用いた彫器（有樋石刃として識別可能）と素材の用い方と樋状剥離の方法が類似している。

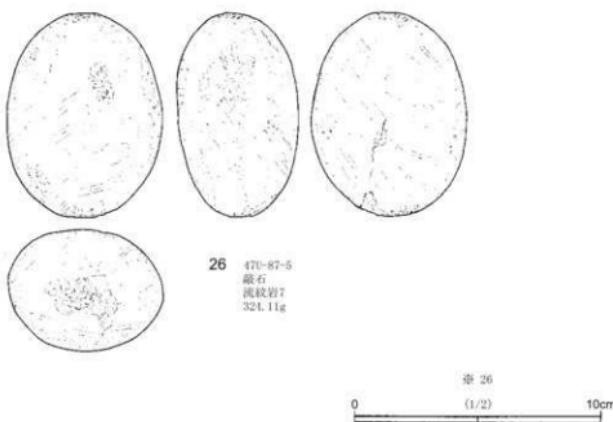
25は石刃である。黒色頁岩が用いられている。打面部と末端部は折断されている。

26は敲石である。流紋岩が用いられている。楕円形の円礫を素材として、長軸の両端部に敲打痕がみられる。特に、下端部の敲打痕は顕著で、剥離面が観察され、裏面平坦部に斜めに亀裂が入る程の強い敲打が行われたことが窺われる。表面平坦部は赤化、周縁部と裏面平坦部は黒色化していることから、肉眼観察ではあるが火熱を受けた可能性が高い。

第9ブロックからは、礫・礫片が19点出土していることからも、V層～IV層下部段階でみられるような礫群的な機能が備わっていた可能性もあることから、この敲石が火熱を受けた可能性を肉眼観察ではない別の科学的な方法で検証する必要があろう。既報告の第9ブロック16の敲石と素材の用い方と敲打の部位が類似しており、近接した位置で出土していることも興味深い特徴といえよう。



※ 1 ~ 22は報告書第670集(2011年刊行)の
第2文化層第9ブロックに掲載済み



第17図 第2文化層第9ブロック出土石器

出土遺物 器種組成は、今回調査分が、微細剥離痕のある剥片1点、石刃2点、剥片11点、碎片2点である。第10ブロック全体では、ナイフ形石器2点、搔器1点、楔形石器1点、二次加工のある剥片7点、微細剥離痕のある剥片1点、石刃2点、削片2点、剥片56点、碎片45点、石核1点、礫片2点である。石材組成は、今回調査分が、ガラス質黒色安山岩10点、黒色頁岩2点、チャート2点、トロトロ石1点、硬質頁岩1点である。第10ブロック全体では、石器石材が、ガラス質黒色安山岩62点、黒色頁岩23点、硬質頁岩20点、チャート9点、ホルンフェルス2点、珪質頁岩1点、トロトロ石1点である。礫石材は流紋岩1点、砂岩1点である。

出土石器の押図番号については、報告書第670集（2011年刊行）の第2文化層第10ブロックに1～12を掲載したので、今回報告の第7次調査分については、その続きの13～16をつけることとした。

13（a+b）は、2点接合して1個体の石刃となる接合資料である。黒色頁岩が用いられている。第10ブロックの南端から出土した。幅広の平坦打面から剥離されている。単独母岩で石刃の形で単独で搬入されている。器体中央部の最も厚みのない部位から折れている。13aと13bは隣接して出土している。人為的に折断された資料ではなく、遺跡が形成された後の自然現象によって折断してしまった資料である可能性がある。腹面部の打瘤はかなり盛り上がっている。第2文化層第9ブロック1～3・5・23や第10ブロック1・2のナイフ形石器の素材形状と一致する。ナイフ形石器を製作するために持ち込まれた石刃である可能性もある。

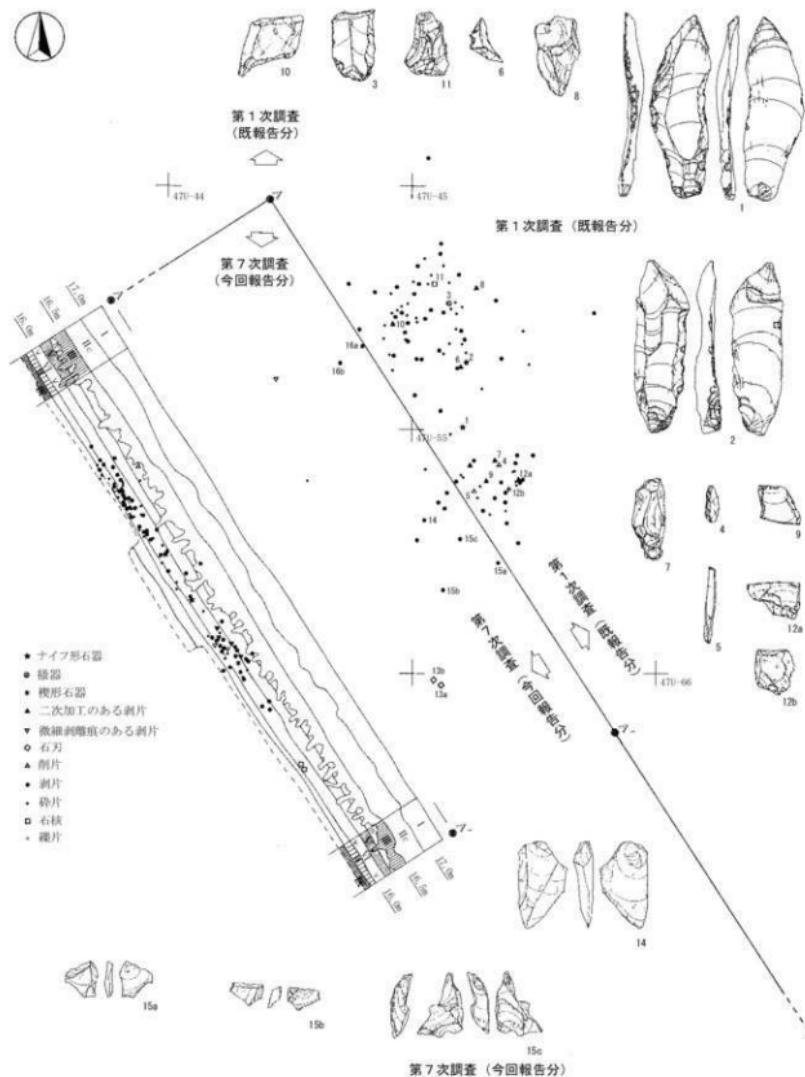
14と15（a～c）は、本ブロックの半数近くを占めるガラス質黒色安山岩4が用いられている。この母岩は、出土点数が多いものの、この母岩からは石刃が剥離されておらず、不定形の剥片が剥離されている。黒色頁岩と硬質頁岩は、ほとんどのものが、石刃あるいは石刃素材石器として遺跡に搬入されていることと対照的な剥片剥離技術を示す点が特徴といえよう。

14は剥片である。打面調整や頭部調整は行われていない。ガラス質黒色安山岩4のうち、最も形状の整った継長の形状の剥片ではあるが、背面構成や側面形状から石刃と分類できるような資料ではない。

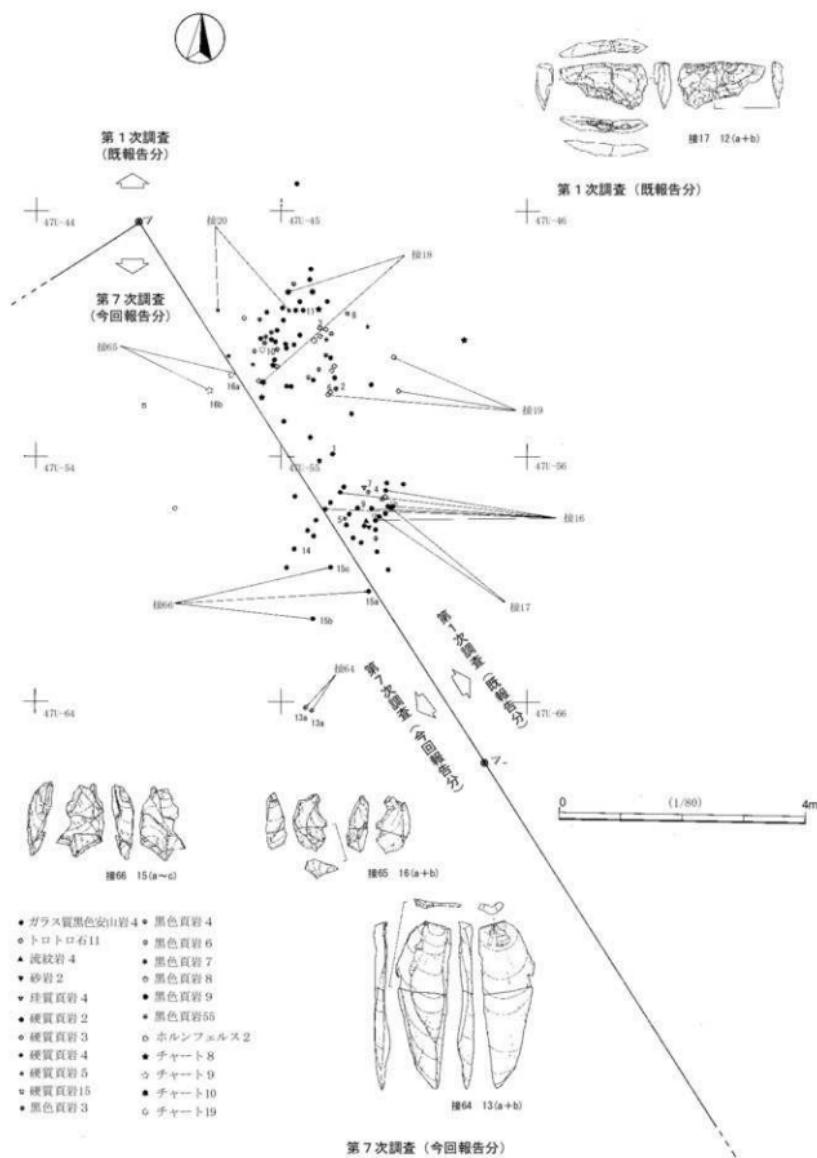
15（a～c）は、不定形な剥片の接合資料である。打面転移が頻繁に行われ、頭部調整や打面調整は行なわれていない。多方向からの剥離面で構成されている。15cの剥片は、多方向からの剥離面で構成されている。本接合資料は、ガラス質黒色安山岩4の剥片剥離技術を特徴づける接合資料といえよう。

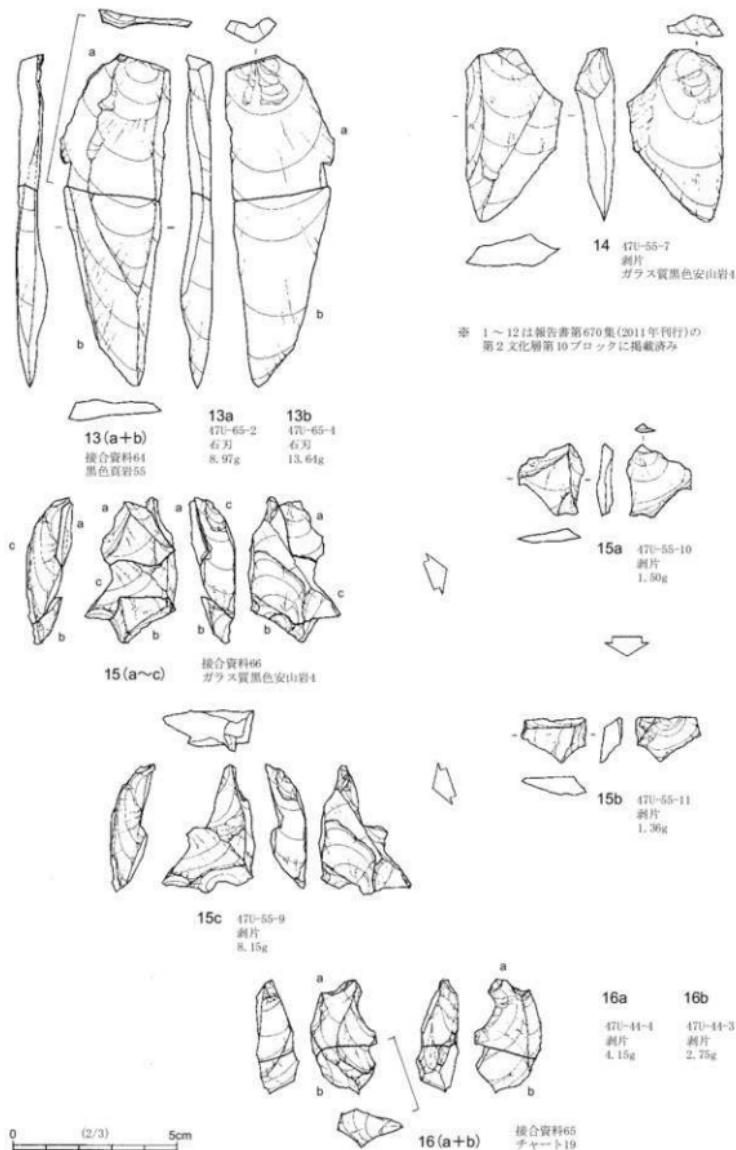
16（a+b）は、不定形な剥片が折断されたことを示す接合資料である。上述のガラス質黒色安山岩4と同様に、多方向からの剥離面で構成され、頭部調整や打面調整は行われていない。

第10ブロックにおいては、ガラス質黒色安山岩やチャートなどの粗悪な石材を主に用いて、剥片剥離を行っていることが観察された。これらの分布状況を詳細にみると、南東部の集中地点においては、主にガラス質黒色安山岩4が持ち込まれ剥片剥離を行い、北西部の集中地点においては、主にチャートが持ち込まれ剥片剥離が行われていた。本遺跡において剥片剥離を行っている資料については、多方向からの剥離を行い不定形な剥片が剥離されていた。それに対して、13（a+b）の石刃や石刃素材石器は、本遺跡において剥片剥離を行った形跡がみられず、製品として遺跡に搬入されていた。このように、石器石材により剥片剥離技術が異なり、石刃や石刃素材石器が搬入されていることが本文化層の特徴であることが、多方向からの剥離が多用されるガラス質黒色安山岩4の資料により浮き彫りとなった。



第18図 第2文化層第10ブロック器種別分布





第20図 第2文化層第10ブロック出土石器

第4章 市野谷入台遺跡

第1節 遺跡の概要（第21・22図、第21・22表）

旧石器時代の確認・本調査範囲と文化層別ブロック位置図は第21・22図のとおりである。遺物分布状況は、ドットで示した。今回報告する第27次・第28次調査範囲は、遺跡の南西部の39R・39S・39Tグリッドと38P・38Q・39Pグリッドに位置する。

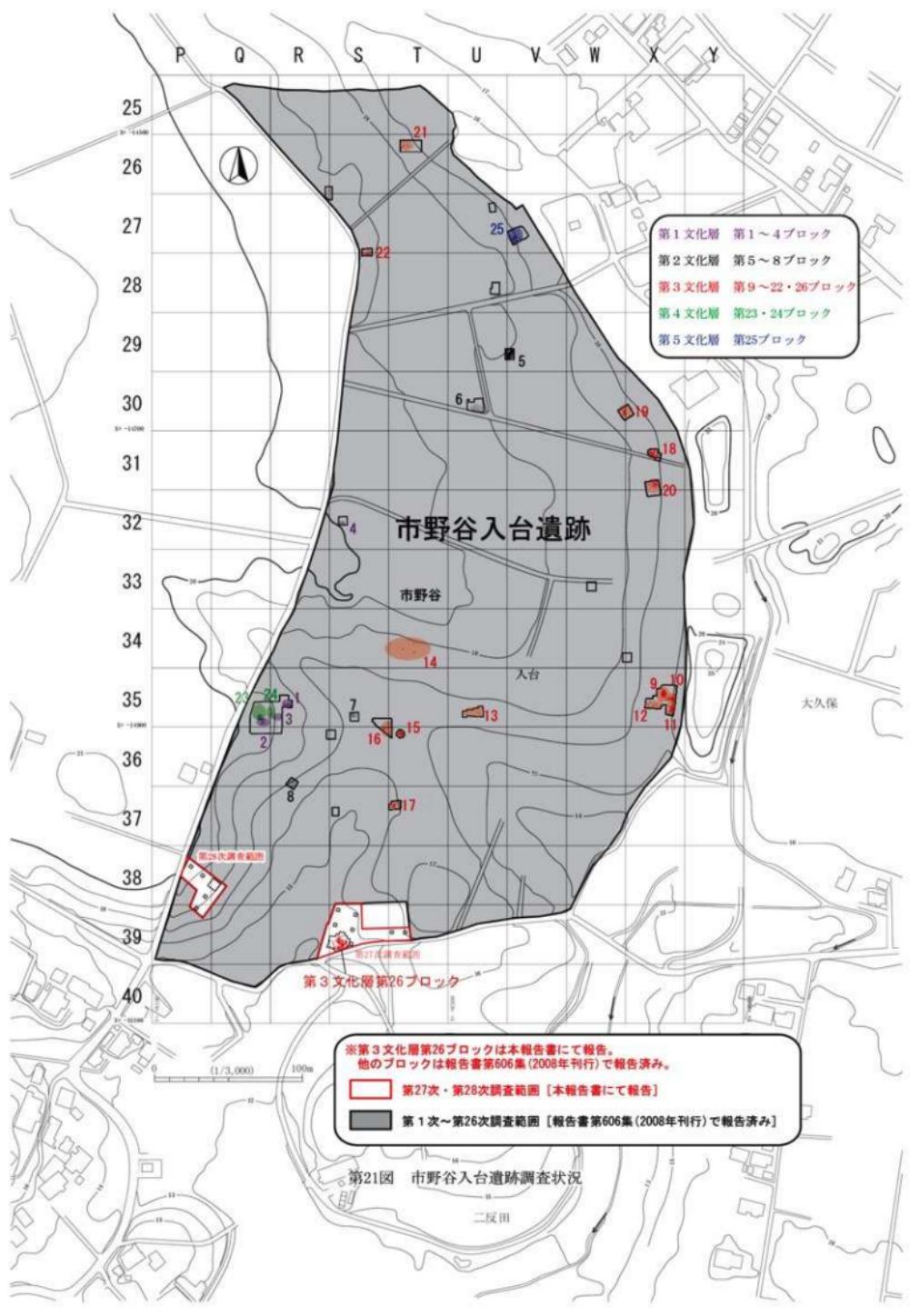
第1次～第26次調査の成果は、報告書第606集（2008年刊行）で報告済みで、総計1,670点の石器が出土し、5枚の文化層から25か所のブロックが検出された。灰色のスクリーントーンで表示した範囲が第1次～第26次調査範囲である。これらの成果と第27次・第28次調査の成果の概要が第21図のとおりである。第27次調査範囲からは、V層～IV層下部に生活面を持つブロックが1か所検出された。第606集で報告した第3文化層に相当することから、今回の報告では第3文化層第26ブロックとして報告することとする。第27次・第28次調査のブロック別器種・石材組成は第21・22表のとおりである。第3文化層第26ブロックの石器総数は225点、第28次調査範囲から単独出土石器が1点出土し、今回の報告では総計226点の資料が追加されることとなった。これにより、既に報告済みの資料との遺跡出土旧石器総計は、1,896点となった。

第21表 文化層ブロック別器種組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	刷 版 器 の あ る 制 片	次 20 工 の あ る 制 片	黒 利 鉛 板 の あ る 制 片	刷 版 片	刷 版 片	刷 版 片			点 数	点 数 比 (%)	重 量 合 計	重 量 比 (%)
							刷 版	刷 版	刷 版				
3	26	1	6	1	19	2	9	187	225	99.56	6886.68	99.39	
单種	单種							1	1	0.44	0.69	0.01	
總 点 数		1	6	1	19	2	9	188	226	100.00	6887.37	100.00	
点 数 組 成 比 (%)	0.44	2.65	0.44	8.41	0.88	3.88	83.19	100.00					

第22表 文化層ブロック別石材組成表

文 化 層	ブ ロ ッ ク	ガ ラ ス 質 黒 色 山 地	ト ロ ト ロ	流 り 放 石	墨 磨 研 石	砂 岩 岩	刷 版 片			ホ ル ン フ エ ル ス	ナ マ ヤ リ ト ト	点 数 比 (%)	重 量 合 計	重 量 比 (%)
							刷 版	刷 版	刷 版					
3	26	2	11	113	12	46	5	2	4	30	225	99.56	6886.68	99.39
单種	单種									1	1	0.44	0.69	0.01
總 点 数		2	11	113	12	46	5	2	4	31	226	100.00	6887.37	100.00
点 数 組 成 比 (%)	0.98	4.87	50.00	5.31	20.38	221	0.88	1.77	13.72	100.00				



第2節 第3文化層

1. 概要（第21図）

第3文化層の生活面はV層～IV層下部と考えられる。今回報告する第26ブロックは第3文化層の石器群と同様の内容を持つ。既に報告した第3文化層の出土総数が818点で、今回報告の第26ブロックが225点であるので、第3文化層の出土総点数が1,043点となった。

既に報告した成果の概要は、第21図のとおりであるが、ここで改めてこれらの成果を記載することにしよう。赤色のスクリーントーンで表示した範囲が第3文化層のブロックの出土範囲である。石器の出土位置は、赤色のドットで示してある。総計818点の石器が出土し、第9～22ブロックの14か所のブロックが検出され、4か所のブロック群に識別される。器種組成は、ナイフ形石器4点、角錐状石器2点、削器1点、搔器3点、磨石1点、二次加工のある剥片17点、微細剥離痕のある剥片24点、石核20点、剥片220点、碎片54点、礫4点、礫片468点で、礫・礫片の占める割合が高い。石材組成は、流紋岩192点、砂岩174点、黒曜石153点、チャート116点、ホルンフェルス107点、珪質頁岩25点、ガラス質黒色安山岩17点、頁岩9点、トロトロ石8点、安山岩7点、玉髓6点、硬質頁岩4点である。石器石材は346点中黒曜石が44%と高い割合を占め、礫石材は流紋岩・砂岩・チャート・ホルンフェルスが主体を占める。

遺跡東南部の35Xグリッド出土の第9～12ブロック群は、多量の焼礫により礫群が形成され、ナイフ形石器・角錐状石器が伴い、多数のブロック間接合がみられた。

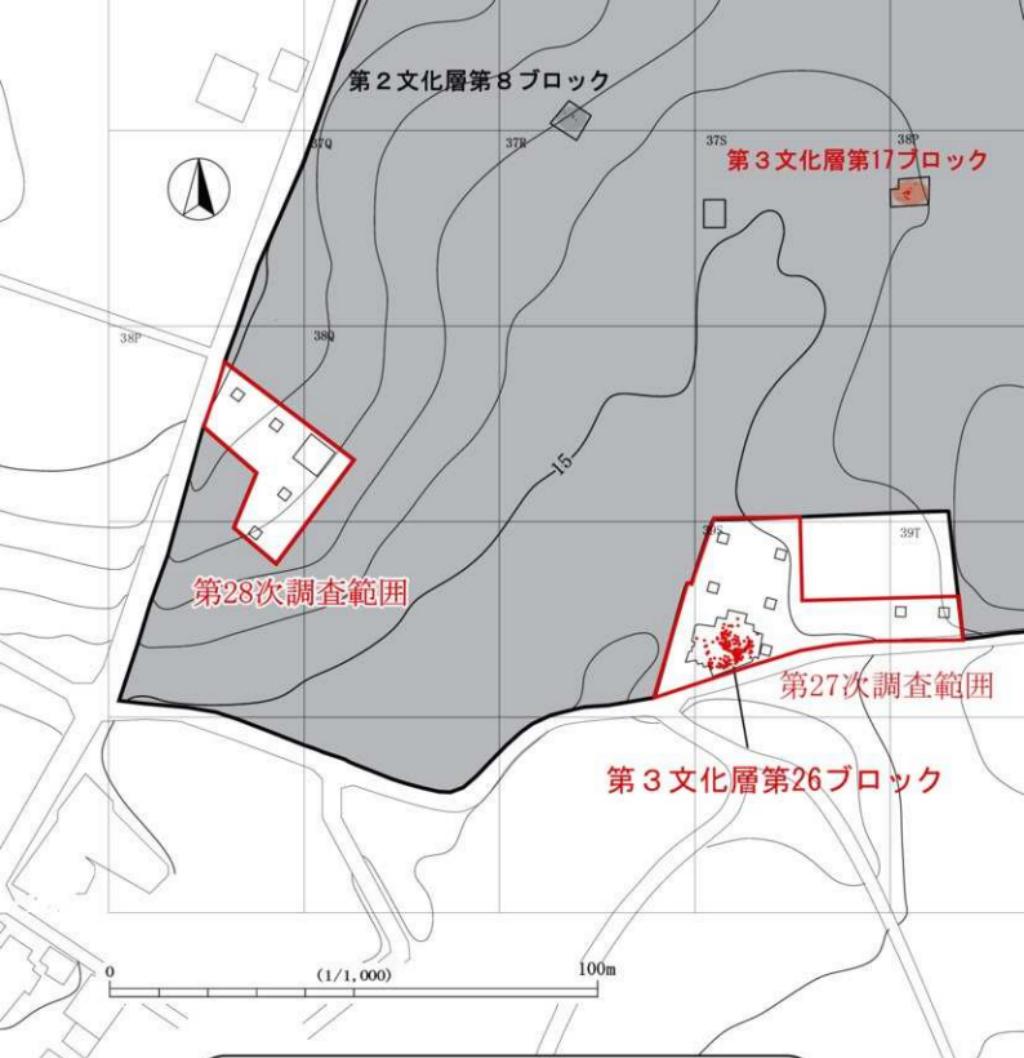
遺跡南部に分布する第13～17ブロック群は、ブロック間接合がみられない。礫群は、第17ブロックに伴うが、第13～16ブロックでは伴っていない。定型的な石器は、第14ブロックの搔器1点と第17ブロックのナイフ形石器1点のみの出土である。現在地図上に表記されている川の流路から離れた位置に分布するものの、南西方向に傾斜する谷津頭の位置に立地している。おそらく第3文化層の形成時期には、南西部の37Sグリッド付近に湧水地があったと推定される。今回報告する第26ブロックは、第13～17ブロック群と近接しており、定型的な石器がわずかであるなど石器群の内容が類似している。特に、礫群を伴う第17ブロックと極似した内容を持つ。

遺跡中央部東側に分布する第18～20ブロック群では、接合資料がみられず、礫片がわずか2点のみの出土で、角錐状石器は出土していない。

遺跡北部に分布する第21・22ブロック群は、定型的な石器は出土しておらず、焼礫は1点の出土である。

2. 第26ブロック（第21～25図、第23～28表、図版5・7）

出土状況 遺跡南西部の39Sグリッドに分布する。北西に約100m離れて第3文化層第17ブロックが分布する。上述のとおり、第3文化層は4か所のブロック群に識別されたが、第13～17ブロック群に隣接しており、石器群の内容が類似していた。特に、礫群を伴い、定型的な石器が少ない点で第17ブロックと極似した内容をもつ。10m×9.4mの範囲に225点の石器が出土した。第3文化層の中で最も出土点数の多いブロックである。出土層位は、VI層～III層にかけて分布し、V層～IV層下部に集中する。分布を詳細にみると、北西部・東部・南西部の3か所の集中地点がみられる。それぞれの集中地点は、橢円形に分布しており、大半を占める礫・礫片が集中地点の中央部に分布している。石器類は集中地点の周辺部に分布する傾向がみられ、39S-51グリッドと39S-71・72グリッドの小範囲にやまとまって分布している。礫片は接合資料がみられたが、石器類は接合資料がみられなかった。

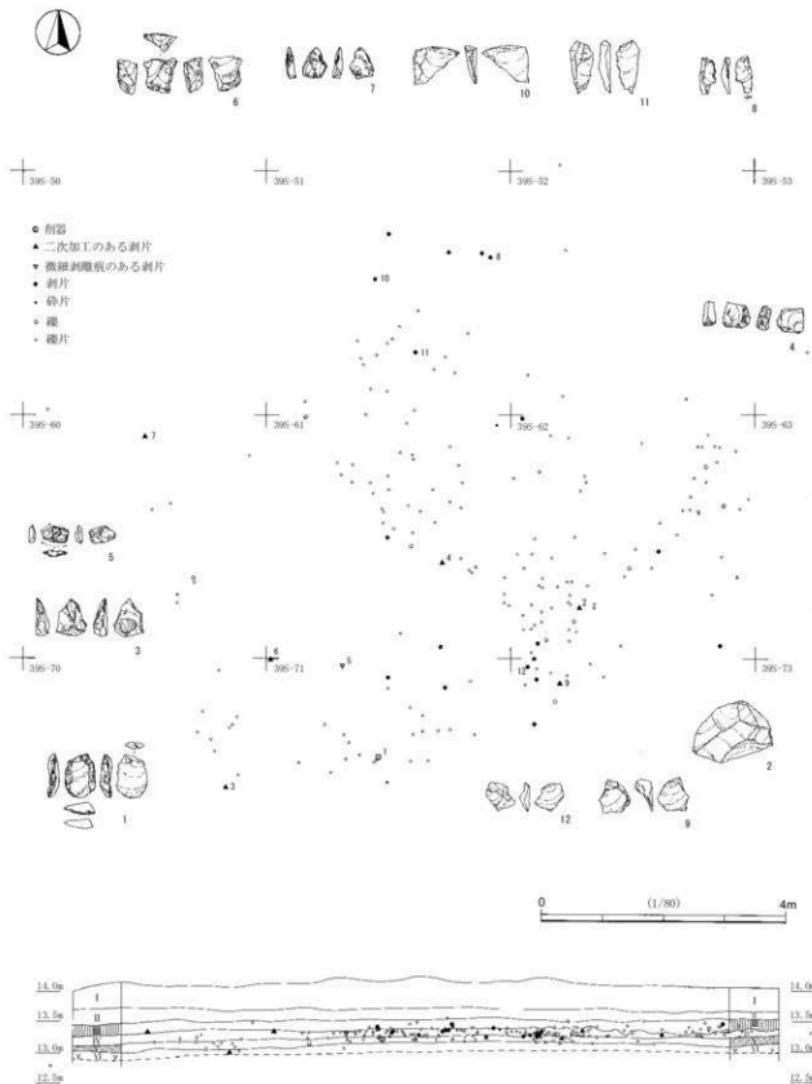


※第3文化層第26ブロックは本報告書にて報告。
他のブロックは報告書第606集(2008年刊行)で報告済み。

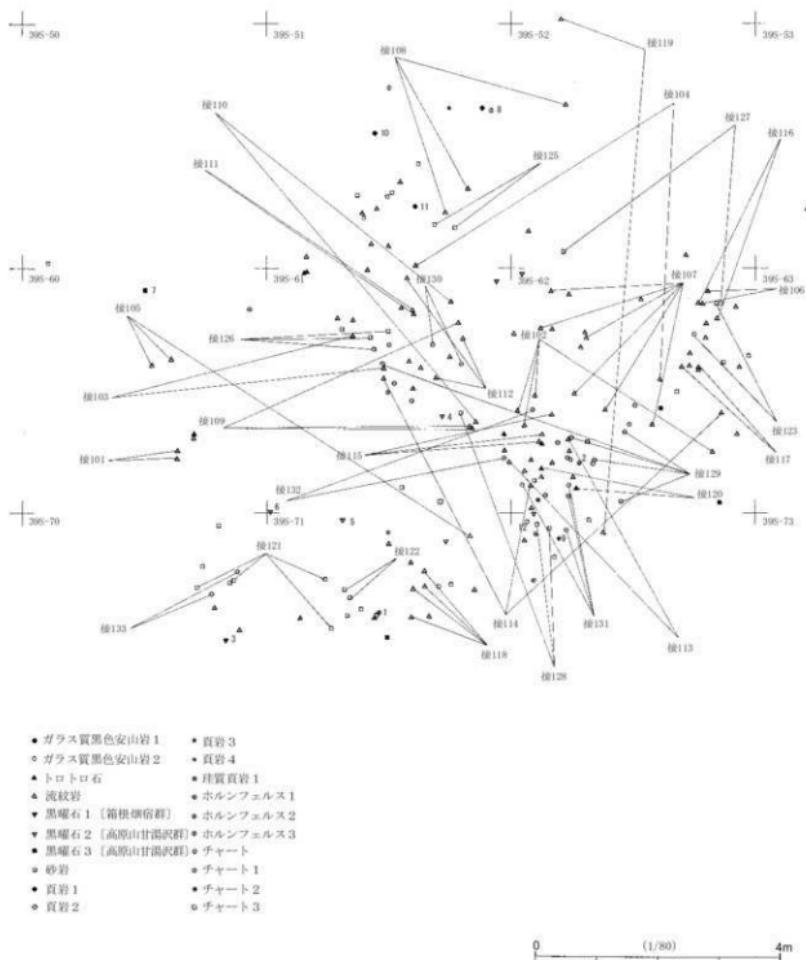
■ 第27次・第28次調査範囲【本報告書にて報告】

■ 第1次～第26次調査範囲【報告書第606集(2008年刊行)で報告済み】

第22図 第27次・第28次調査範囲とブロック位置図



第23図 第3文化層第26ブロック器種別分布



第24図 第3文化層第26ブロック母岩別分布

出土遺物 器種組成は、削器1点、二次加工のある剥片6点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片19点、碎片2点、礫9点、礫片187点である。定型的な石器が削器1点のみの出土で、礫・礫片が196点で87%もの高い割合を示す。この器種組成は第17ブラックと類似する。石材組成は、石器石材29点、礫石材196点である。その内訳は、石器石材が、黒曜石12点、頁岩5点、ホルンフェルス4点、チャート4点、ガラス質黑色安山岩2点、珪質頁岩2点の総計29点である。石器石材において、黒曜石の占める割合が41%と高いことか特徴である。黒曜石産地推定地の内訳は、高原山甘湯沢群11点、箱根烟宿群1点である。

1は削器である。縦長剥片を素材として、右側縁を折断した後に調整加工が施されている。左側縁は平坦な調整加工が施されている。素材末端部にも調整加工が施されており、この部位の調整加工に着目して搔器や器種分類することも可能である。細粒で良質の珪質頁岩が用いられている。

2は厚みのある横長剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工が施された二次加工のある剥片である。ホルンフェルスが用いられている。3～7は黒曜石が用いられている。3が箱根烟宿群、4～7が高原山甘湯沢群のものである。いずれも小型の剥片を素材として、折断による成形や粗い調整加工が施されている。3・4・6・7は二次加工のある剥片、5は微細剥離痕のある剥片である。3は幅広の打面から剥離された横長剥片を素材として、左側縁が2回の折断により成形された後に、右側縁上部に急角度の調整加工が施されている。先端部は尖った形状をしており、形態的には7と類似する。4は平坦な打面から剥離された幅広の剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工が施された後に、素材末端部が折断されている。5は平坦打面から剥離された厚みのない横長剥片を素材として、末端部が折断されている。左側縁と下面の縁辺部には微細剥離痕が観察される。6は厚みのある幅広剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工を

第23表 第3文化層第26ブロック組成表

母岩	器種	発掘番号	黒曜石皮地密度	剥離	二次加工の、微細剥離痕のある剥片	剥片	伴片	礫	礫片	各数合計	点数比(%)	累積合計(g)	重量比(%)		
ガラス質 黒色 安山岩	1					1			1	0.44	2.70	0.04			
	2					1			1	0.44	1.15	0.02			
ガラス質 黒色 安山岩点数合計															
トロ	トロ	石						2	9	11	4.89	556.12	9.55		
流	放	岩						2	111	113	50.22	4360.58	83.32		
黒	耀	石	1	箱根烟宿群	1			1	0.44	2.66	0.04				
			2	高原山甘湯沢群	2	1	3	1	7	3.11	7.91	0.11			
			3	高原山甘湯沢群	1		2	1	4	1.78	1.99	0.03			
黑曜石点数合計															
砂		岩						2	44	46	20.44	1282.04	18.62		
貞		岩						2	0.89	5.78	0.08				
	1					2			1	0.44	4.46	0.06			
	2					1			1	0.44	2.36	0.03			
	3					1			1	0.44	0.58	0.01			
頁	岩	点	数	合	計			5	5	2.22	13.18	0.19			
頁岩点数合計															
珪質	頁岩	1			1		1	2	2	0.89	3.48	0.05			
ホ	ル	ン	フェ	ル	ス	1		1	2	0.89	47.99	0.70			
		2						1	1	0.44	9.11	0.13			
		3						1	1	0.44	4.90	0.07			
ホルンフェルス点数合計															
チヤート	1							2	2	0.89	2.42	0.04			
								1	1	0.44	2.83	0.04			
								1	1	0.44	1.85	0.03			
チヤート点数合計															
全	体	点	数	合	計			1	3	23	30	133.3	402.86	7.16	
点	数	相	成	比	(%)				2	9	187	225	100.00	6886.68	100.00
						0.44	2.67	0.44	8.44	0.89	4.00	82.11			



第25図 第3文化層第26ブロック出土石器

施した後に、上下両面と左側縁を折断している。7は平坦打面から剥離された横長剥片を素材として、左側縁上部と右側縁中央に急角度の調整加工が施されている。先端部は尖っており、3と形態的に類似する。下面是折断されている。8・9はチャートが用いられている。8は点状の打面から剥離された縦長剥片である。末端部は折断されている。9は幅広の打面から剥離された横長剥片を素材として、左側縁は折断され、右側縁下部には粗い調整加工が施されている。10は頁岩が用いられている。自然面の打面から剥離された横長剥片である。右側縁は折断されている。11・12はガラス質黒色安山岩が用いられている。11は平坦打面から剥離された縦長剥片である。12は平坦打面から剥離された幅広の剥片である。

本ブロックから出土した資料は、背面構成が多方向から剥離された資料が多く、頭部調整や打面調整がほとんど行われていない。既報告の第3文化層の石器群と同様の内容を持つものといえよう。

第3節 黒曜石の産地推定結果について

黒曜石の産地同定は明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に分析を依頼した。また、分析方法と産地推定法については、第2章第4節において記載してあるので参照していただきたい。

1. 分析結果（第26図）

分析結果は、第26図のとおりである。市野谷入台遺跡の第3文化層第26ブロック出土黒曜石12点のうち、特徴的な石器5点を分析対象とした。5点の分析番号は、IN-XR001～IN-XR005である。分析資料の遺物属性は左上の表、元素の組成・産地の候補地についてはその下の表に記載した。

また肉眼観察によると、IN-XR002（箱根烟宿群）が黒曜石1、IN-XR001・003・004（高原山甘湯沢群）が黒曜石2、IN-XR005（高原山甘湯沢群）が黒曜石3にそれぞれ識別できた。分析を行わなかった7点の資料については黒曜石2と黒曜石3とに識別できため、分析を行っていない資料についても、高原山甘湯沢群のものとして取り扱った。これらの成果は、第23表の第3文化層第26ブロック組成表と第24～28表の市野谷入台遺跡石器属性表に掲載してあるので併せて参照していただきたい。

分析結果をまとめると、第3文化層第26ブロックから出土した12点の黒曜石の推定産地組成は、高原山甘湯沢群11点、箱根烟宿群1点という結果となった。

2. 分析結果の解析

この結果は、既に報告した第3文化層出土の黒曜石の様相とほぼ一致する。ただし、既に報告した第3文化層の産地推定において、分析した9点がすべて高原山甘湯沢群であったため、153点出土した黒曜石がすべて高原山甘湯沢群のものであろうと推測していた。しかしながら、今回の第26ブロックにおいて、箱根烟宿群が1点出土していることから、既に報告した第3文化層の黒曜石のなかに箱根烟宿群の資料も含まれている可能性がある。全点分析が本来は望ましいといえよう。

V層～IV層下部の周辺遺跡において、高原山甘湯沢群と箱根烟宿群を伴う石器群としては、市野谷向山遺跡第3文化層と大久保遺跡第2a文化層があげられる。ただし、推定産地の組成比が大きく異なる。

参考文献

- (財) 千葉県教育振興財團 2008年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3－流山市市野谷入台遺跡－』
- (財) 千葉県教育振興財團 2011年『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5－流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡－』

判別図法・判別分析からの最終結果

分析番号	文化層	ブロック	排因番号	グリッド	遺物番号	器種	重量	推定产地
IN-XR001	3	26	4	第1ブロック	0082	二次加工のある剝片	1.73	高原山甘瀬沢群
IN-XR002	3	26	3	第1ブロック	0160	二次加工のある剝片	2.66	箱根焼宿群
IN-XR003	3	26	6	第1ブロック	0167	二次加工のある剝片	4.66	高原山甘瀬沢群
IN-XR004	3	26	5	第1ブロック	0168	微細剥離痕のある剝片	0.51	高原山甘瀬沢群
IN-XR005	3	26	7	第1ブロック	0173	二次加工のある剝片	1.06	高原山甘瀬沢群

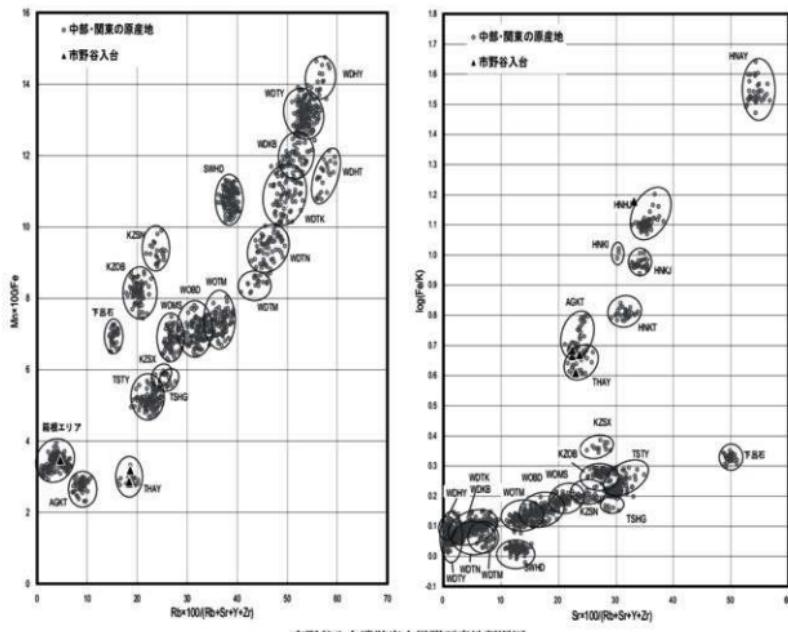
黒曜石産地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%
箱根	煙宿	HNHJ	1	20.0
高原山	甘瀬沢	THAY	4	80.0
		合計	5	100.0

判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

分析番号	推定产地	判別図 判別群	判別分析						Fe/K
			候補1	距離1	確率1	候補2	距離2	確率2	
IN-XR001	THAY	THAY	THAY	1.04	1.00	AGKT	118.54	0.00	18.65
IN-XR002	HNHJ	HNHJ	HNHJ	27.39	1.00	HNKJ	92.75	0.00	4.66
IN-XR003	THAY	THAY	THAY	2.32	1.00	AGKT	105.39	0.00	18.47
IN-XR004	THAY	THAY	THAY	2.92	1.00	AGKT	103.78	0.00	18.39
IN-XR005	THAY	THAY	THAY	1.58	1.00	AGKT	118.95	0.00	18.60

不可	0
計	5



第26図 市野谷入台遺跡出土黒曜石産地判別図

第5章 西初石五丁目遺跡

第1節 遺跡の概要（第27図、第29・30表）

旧石器時代の確認・本調査範囲と石器集中地点位置図は第27図のとおりである。今回報告する第18次・第19次調査範囲は、遺跡北部の16Lと16I・16J・17H～J・19H～J・20G～Iに位置する。石器集中は1か所検出され、第5地点と呼ぶ。20Hグリッドから出土している。第5地点からは75点、17J-28グリッドから単独で1点の石器が出土しており、今回報告する石器は総計76点である。

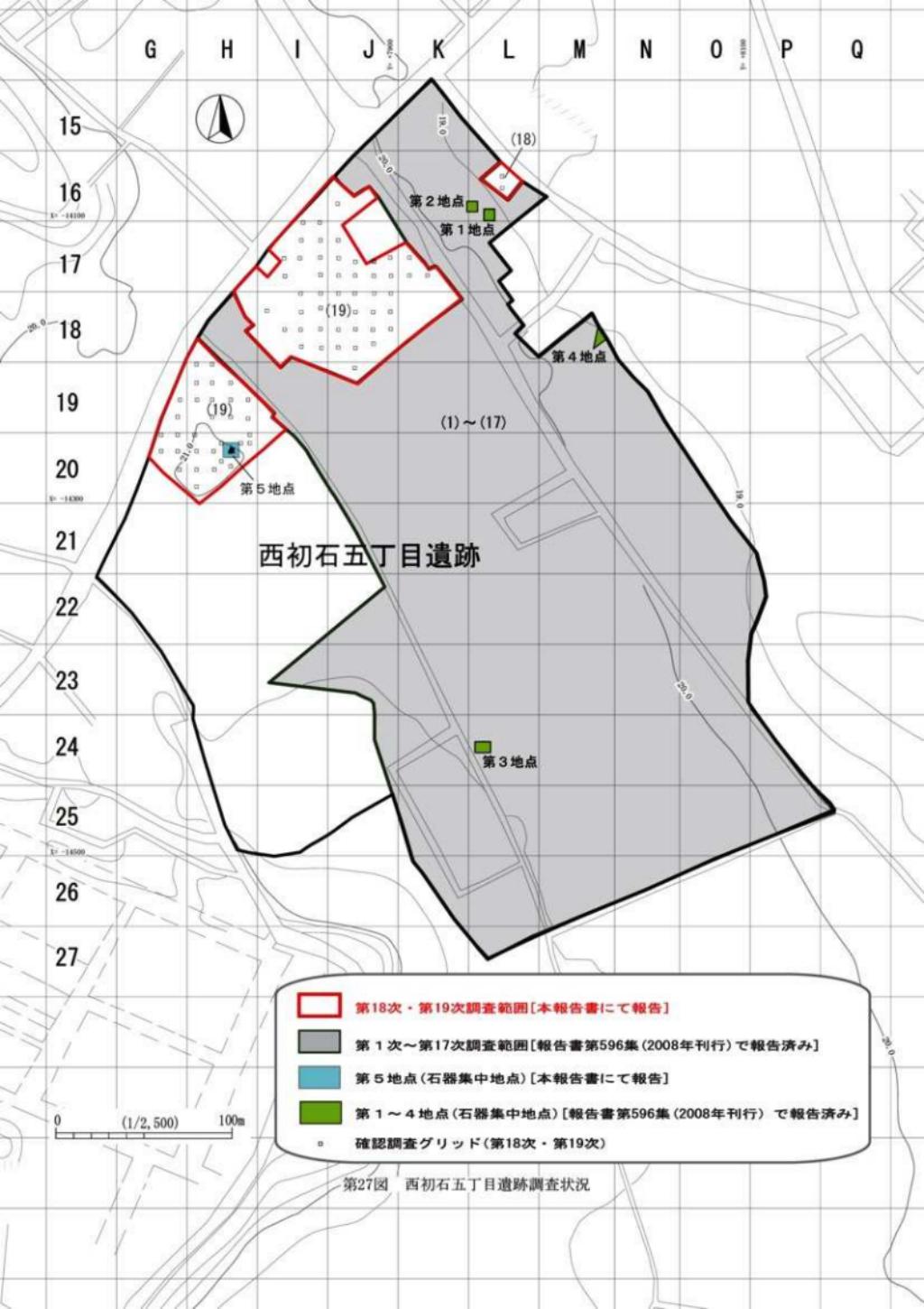
第1次～第17次調査の成果は、報告書第596集（2008年刊行）で報告済みで、総計127点の石器が出土している。4か所の石器集中地点が検出されており、第1地点～第4地点と呼ぶ。第1地点～第4地点の文化層の設定はされていない。第1地点は、総計88点の石器が出土し、IX層に生活面を持つ。定型的な製品は出土しておらず、ガラス質黒色安山岩・珪質頁岩・チャートを主要石材として、打面転移を頻繁に行い、主に横長剥片が剥離されている。第2地点は、総計5点の石器が出土し、IV層下部～IV層中部に生活面を持つ。二側縫加工のナイフ形石器が2点出土している。第3地点は、総計21点の石器が出土し、IV層下部～IV層中部に生活面を持つ。4点のナイフ形石器が出土している。第4地点は総計6点の石器が出土し、III層に生活面を持つ。今回報告する第5地点の石器群は、IV層下部～IV層中部に生活面を持ち、第2地点と第3地点の石器群と同じ段階の石器群として捉えることが可能であろう。

第29表 文化層地点別器種組成表

出 土 地 点	角 材 块 石 片	ナ イ フ 形 石 片	二次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 离 痕 跡 の あ る 剥 片	新 石 器			合 計	重 量 合 計	重 量 比		
					新	石	器					
第5地点	4	1	8	1	48	6	5	75	98.68	325.91	89.82	
单 独 出 土								1	1	1.32	36.93	10.18
総 合 点 数	4	1	8	1	48	6	5	76	100.00	362.84	100.00	
点 数 組 成 (%)	5.26	1.32	10.53	1.32	63.16	10.53	6.58	1.32	100.00			

第30表 文化層地点別石材組成表

出 土 地 点	ガ ラ ス 質 黒 色 安 山 岩	玉 材 块 石 片	ホ ル ン フ エ ル ス	合 計	石 材			重 量 合 計	重 量 比
					石 材 數	石 材 比	石 材 合 計		
第5地点	41		27	7	75	98.68	325.91	89.82	
单 独 出 土		1			1	1.32	1.32	36.93	10.18
総 合 点 数	41	1	27	7	76	100.00	362.84	100.00	
点 数 組 成 (%)	53.95	1.32	36.53	9.21	100.00				



第2節 第5地点

1. 概要 (第27図、第29・30表)

既に報告された第1次～第17次調査から第1地点～第4地点の石器群が出土した。これらの石器群には文化層の設定が行われていないものの、石器群の様相から、今回報告する第5地点から出土石器は、第2地点と第3地点の石器群と同じ段階の石器群として捉えられた。生活面はIV層下部～IV層中部と考えられる。

2. 第5地点 (第28～34図、第31～33表、図版5・7)

出土状況 遺跡北西部の20Hグリッドに分布する。西初石五丁目遺跡の中で最も高い標高21.0m(現地表面)に立地する。北東約180m離れて第1・2・4地点、南東部約210m離れて第3地点の石器群が分布している。4.4m×3.0mの範囲から75点の石器が出土した。分布を詳細にみると、北東部・南西部の2か所の集中地点がみられるが、これらの境界は明確ではない。石器集中地点内での接合関係はみられるが、石器集中地点間接合はみられなかった。出土層位は、V～IV層からIII層にかけて出土しており、V～IV層に集中する。石器群の様相などから判断して、生活面はIV層下部～IV層中部と考えられる。

出土遺物 器種組成は、角錐状石器4点(個体点数としては3点)、ナイフ形石器1点、二次加工のある剥片8点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片48点、碎片8点、石核5点である。石材組成は、ガラス質黒色安山岩41点、ホルンフェルス27点、玉髓7点である。

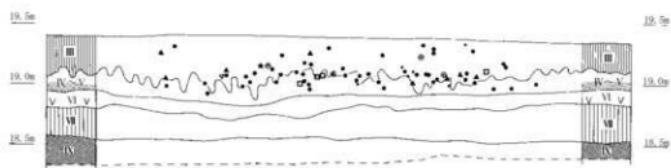
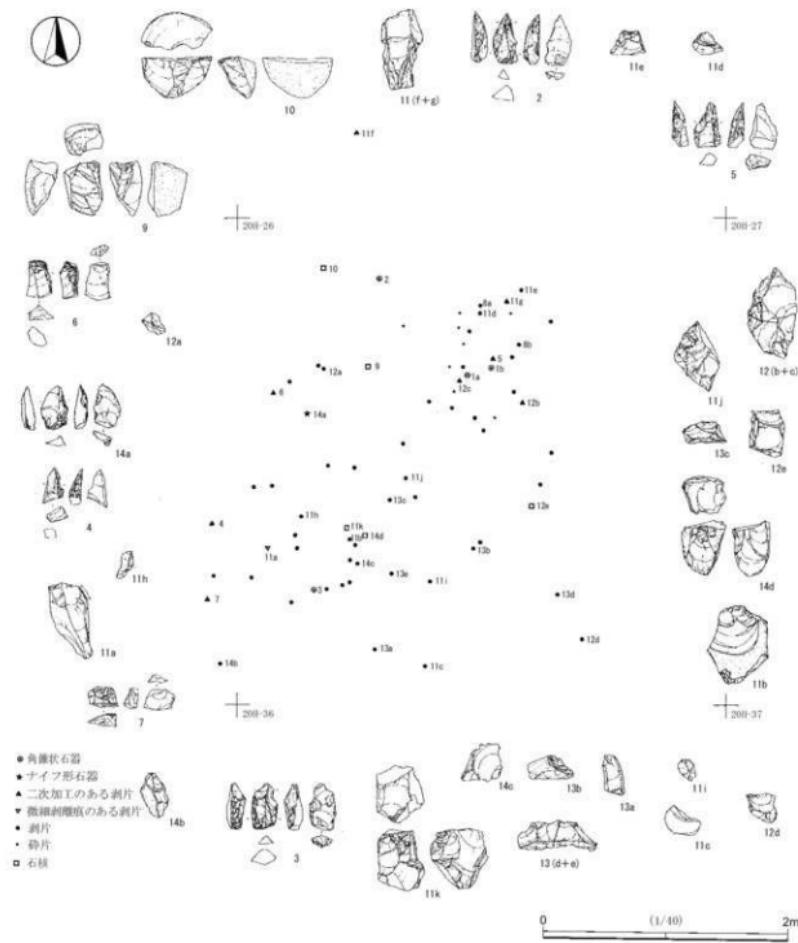
1～3は、角錐状石器である。いずれも縦長剥片を素材として、打面を基部側に設置している。

1(a+b)は、器体の中間部から折れて接合した角錐状石器である。2点接合して1個体の角錐状石器となっている。したがって、角錐状石器は4点出土しているが、個体点数としては3点である。先端部が左側に湾曲した縦長剥片を素材として、左側縁と右側縁下部に粗い調整加工が施されている。素材の打面は残存している。左側縁中央部に最終調整が施されており、折れ面の打点はこの調整加工部位にあることから、最終調整加工の際に破損した接合資料である可能性が高い。右側縁上部に素材剥離面の縁辺があることから、ナイフ形石器と識別することも可能であるが、2・3と形態的に類似していることから、角錐状石器と分類した。

2は縦長剥片を素材として、ほぼ全周に鋸歯状の調整加工が施されている。素材面は打面部のみが残されている。1と同一母岩のホルンフェルス1が用いられている。1と比べると器体長さが半分程度である

第31表 第5地点組成表

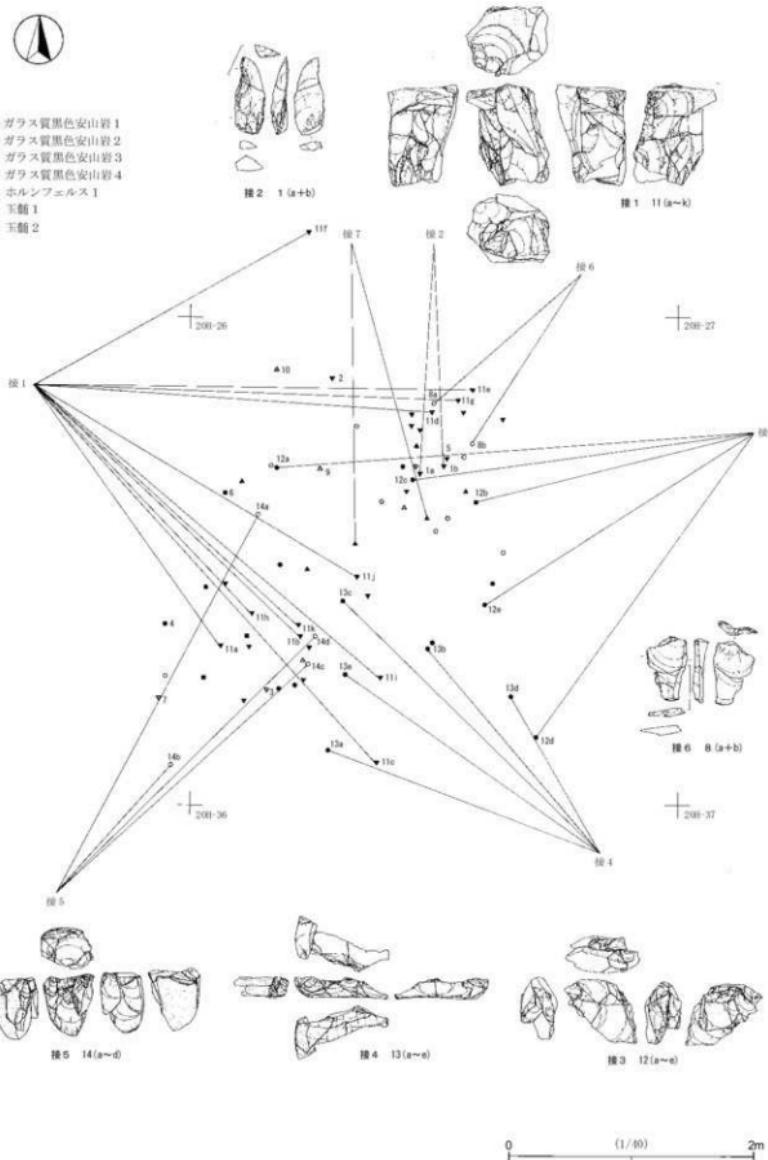
母岩種	母岩番号	角錐状石器	ナイフ形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	直敷合計	直敷比(%)	重複合計(%)	重複比(%)
ガラス質黒色安山岩	1			3		12	1	1	17	22.97	47.75	14.65
	2		1			10	2	1	14	18.87	42.19	12.90
	3					5	1		6	8.00	34.81	10.58
	4					2		2	4	3.33	41.99	12.87
ガラス質黒色安山岩直敷合計			1	3		29	4	4	41	54.67	158.71	14.19
ホルンフェルス	1	3		2	1	15	4	1	27	36.00	127.78	42.28
玉髓	1	1		1		1			3	4.00	14.89	4.57
	2					3			6	1.33	6.53	2.00
玉髓直敷合計			1	2		4			7	9.33	21.42	6.57
全体直敷合計			4	1	8	1	48	8	5	75	100.00	325.91
直敷種度比(%)		53.0	13.3	10.67	1.33	64.00	10.87	6.67	100.00			100.00



第28図 第5地点器種別分布



- ガラス質黒色安山岩 1
- ガラス質黒色安山岩 2
- ▲ ガラス質黒色安山岩 3
- △ ガラス質黒色安山岩 4
- ▼ ホルンフェルス 1
- ▼ ホルンフェルス 2
- 玄武岩 1
- 玄武岩 2



第29図 第5地点母岩別分布

が、主要剥離面を観察すると、1と同じ大きさの縦長剥片が用いられている。素材に対する先端部の調整加工が入念に行われていることから、リダクションにより器体の長さが半分になった可能性が高い。右側縁からの調整加工が施されて、先端部が尖った形状をしている。1も左側縁からの調整加工が施され、尖端部が尖った形状をしており、尖端部の形状も1と類似する点が多い。

3は縦長剥片を素材として、ほぼ全周に鋸歯状の調整加工が施されている。2と同様に、素材面は打面部のみが残されている。左側縁下部には細かい調整加工が施されているが、その他の部位は、粗い調整加工が施されている。裏面には平坦な調整加工が施されており、裏面左下部は打瘤を除去するような平坦剥離が行われている。先端は折れている。完形の形状は、1・2のように先端部が尖った形状であったことが推察され、尖端部が破損した後に、再生加工が行われた可能性が高い。

4～7は二次加工のある剥片である。いずれも鋸歯状の調整加工が施されていることから、角錐状石器の製作工程で作出されたものである可能性が高い。いずれも、縦長剥片を用いている。4・5は先端部の破損品と思われ、素材末端部を用いている。6・7は基部の破損品と思われ、素材打面部を用いている。これらの素材の用い方も、1～3と共通する点が多い。

4は右側縁に鋸歯状の調整加工が施されている。左側縁は折断により成形されている。下端部は背面方向から折れており、右側縁からの調整加工が行われた際に破損した可能性が高い。

5は両側縁に鋸歯状の調整加工が階段状に施されている。左側縁に粗い調整加工を施した後に、右側縁に急角度の調整加工が施されている。下端部は折れており、右側縁からの調整加工の際に破損した可能性が高い。

6は縦長剥片を素材として、素材打面部を残して、右側縁に鋸歯状の調整加工が施されている。下端部は破損しており、右側縁の調整加工の際に破損した可能性が高い。

7は縦長剥片を素材として、6と同様に素材打面部を残して、右側縁に鋸歯状の粗い調整加工が施されている。下端部は折れており、右側縁からの調整加工の際に破損した可能性が高い。

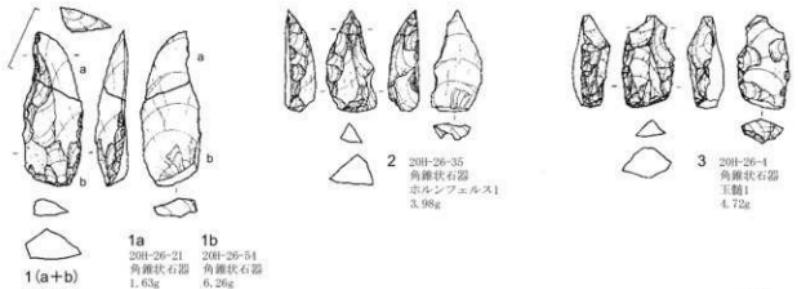
尖端部の破損品と思われる4・5は、どちらも縦長剥片を用いており、右側縁に急角度の鋸歯状の調整加工が施されており、下端部の破損は、この調整加工の際に破損している。また、基部の破損品と思われる6・7も縦長剥片を素材としており、素材打面部を残して一側縁に粗い調整加工が施されていた。下端部の破損も、4・5と同様に一側縁からの調整加工の際に破損している可能性が高かった。

これらの特徴は、1(a+b)の先端部と基部とが接合して1個体となった角錐状石器に端的に表されており、尖端部の1aは4・5の形状、基部の1bは6・7の形状と類似する。このように、角錐状石器の製作工程において、破損するものが多くみられたことが推察され、3の角錐状石器は、尖端部が破損した後にも、器体を整形加工して継続して用いた資料である可能性が高い。これらの資料は、本ブロックにおいて角錐状石器が製作されたことを示す良好な資料といえよう。

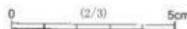
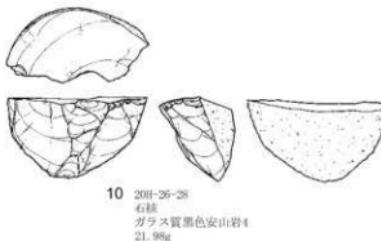
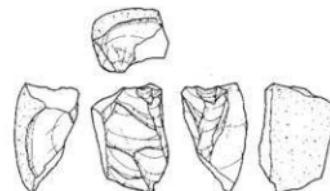
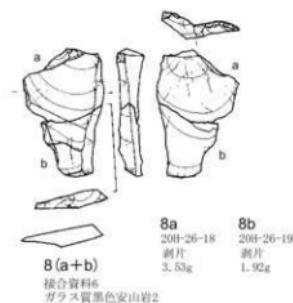
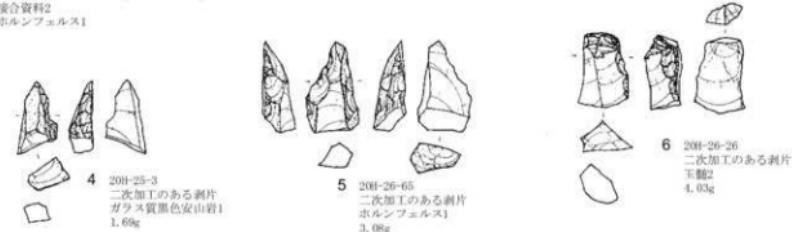
8(a+b)は縦長剥片の接合資料である。幅広の打面から剥離された厚みの剥片が剥離されており、器体の中央部から折れている。

9・10は石核である。同一母岩のガラス質黒色安山岩4が用いられており、自然面を大きく残していることから、分割礫を素材としたものと思われる。

9は裏面に自然面を大きく残し、上面の分割面を打面として、縦長剥片を剥離していることが窺える資料である。しかしながら、本資料からは、両側縁が整った石刃状の縦長剥片は剥離されておらず、不定形



接合資料2
ホルンフェルス1



第30図 第5地点出土石器 (I)

な縦長剥片が剥離されている。

10は9と同様に、裏面に自然面を大きく残し、上面の分割面を打面として、縦長剥片が剥離されている。打面部右側に頭部調整の痕跡がみられる。また、下端部中央に石核調整と捉えることが可能な調整加工がみられる。

ガラス質黒色安山岩4は4点出土しているうち、石核が9・10の2点であり、ガラス質黒色安山岩4からそれほど多くの剥片が剥離されていない。9・10の石核は、今後も剥離が可能な形状を保持していることから、石材が枯渇した際に備えて持ち込まれた石核である可能性が高い。

11(a～k)は楕円形礫を素材として、打面を頻繁に転移しながら縦長剥片を剥離したことが窺える接合資料である。良質のホルンフェルス1が用いられており、1(a+b)と2の角錐状石器も同一の母岩である。上面には自然面が残されており、自然面の形状から、大型の楕円形礫を素材としたことが推察される。また、表面中央部にボディ面がみられることから、分割礫を素材として、角柱状に石核を成形した後に縦長剥片剥離が行われていることが窺える。剥離工程を順次観察すると①～⑦のとおりとなる。

①：当初の剥離工程は、裏面左側を打面として、幅広の大きな剥片を剥離した後に、右側縁右側に打面を転移して、頭部調整を行いながら縦長剥片が数枚剥離されていることが観察される。これらの工程の資料は、本ブロックにおいてみられない。11(a～k)の資料が、本ブロックに持ち込まれる前に、他の遺跡において剥片剥離が行われたことを示す剥離工程である可能性が高い。

②：次の工程以降は、本ブロックにおいて接合資料がみられることから、本ブロックにおいて石器製作を行ったことを示す資料である。上面を打面として設置して、上面下部から打面調整を行った後に、上面右下部を打面として、縦長剥片11aが剥離されている。

③：次に、左側縁上部に打面を転移して、幅広で厚みのある縦長剥片11bを剥離することで、打面を再生している。11bの打面再生を行った後の打面の形状は、上面の変遷図11(c～k)に図示しておいた。11(c～k)の状態の時に、上面左側から打面調整が行われ、幅広の剥片11cは剥離されている。

④：11cの打面調整により作出された打面から、11(d～g)の縦長剥片が剥離されている。11(d～g)は調整加工が行われ、小形幅広の調整剥片11dと11eが剥離されて、二次加工のある剥片11(f+g)が作出されている。11(f+g)の左側縁下部には、鋸歯状の調整加工が施されていることから、1(a+b)や2のような角錐状石器を製作しようとしたことが推察される。11(f+g)は右側縁下部の調整加工の際に、器体の中央部から破損し、11fと11gの資料に分割されている。11(d～g)は、本ブロックにおいて、角錐状石器の素材である縦長剥片が剥離され、角錐状石器の調整加工が行われたことが窺える良好な接合資料といえよう。

⑤：次に、上面の変遷図11(d～k)で示したように、さらに上面下部から打面調整が行われ、小形の剥片11hと11iが剥離されている。

⑥：11hと11iの打面調整から作出された打面から、11(d～g)の方向に剥離が数回行われているが、整った形状の縦長剥片が剥離されていない。その後、打面を左側縁上部に転移して、幅広の剥片11jを剥離している。

⑦：残核である11kは上面を打面として、頭部調整を行いながら縦長剥片が剥離されている。残核の形状はサイコロ状の形態を呈する。

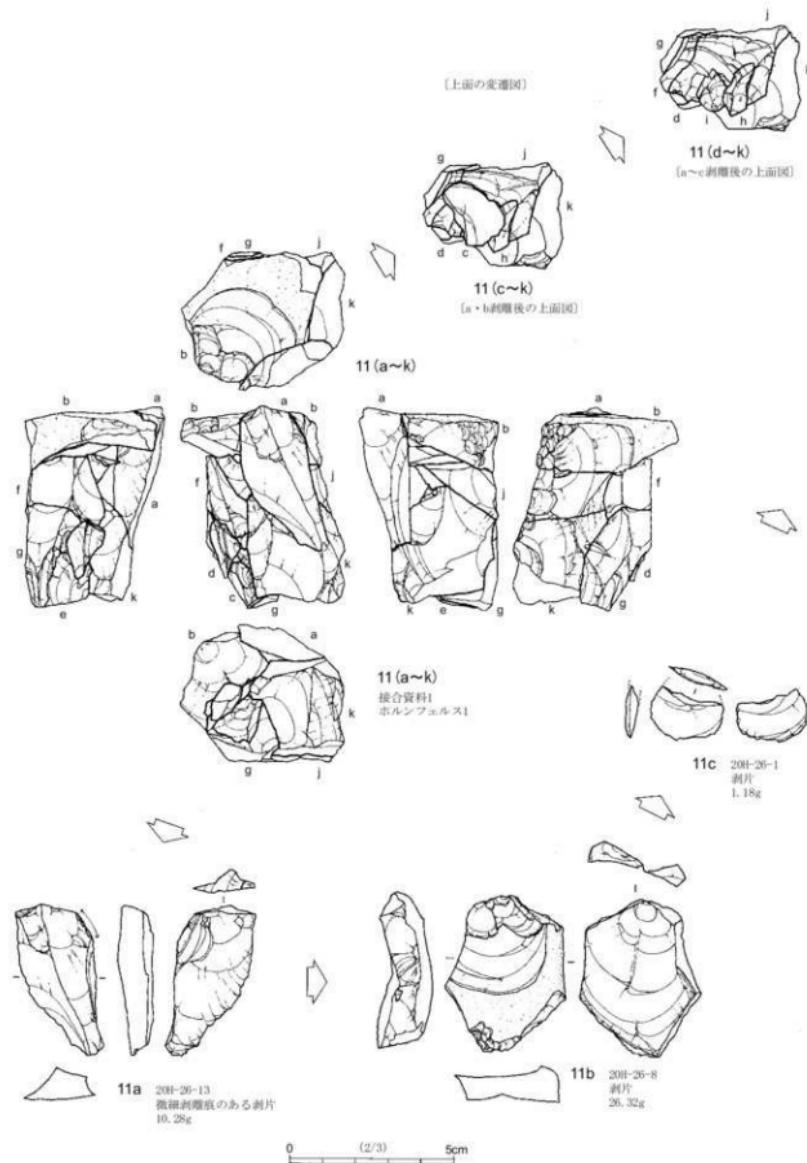
12(a～e)と13(a～e)はガラス質黒色安山岩1を用いた接合資料である。

12 (a～e) は上面中央部に自然面が残され、表面下部にポジティブ面を持つことから、分割礫を素材として、剥片剥離が行われた接合資料であると考えられる。左側縁上部を打面として、縦長剥片12 (a～c) が剥離されている。12 (a～c) は左側縁上部と裏面左側縁下部に平坦な調整加工が施されている。12a は左側縁中央部からの平坦調整加工に伴う剥片である。左側縁上部の調整加工を行った後に、裏面左側縁下部に平坦調整加工を行った際に、器体の中央部から破損して、12b と12c とに破損している。破損後は、調整加工が行われていない。12 (a～c) は、縦長剥片を用いており、調整加工の特徴から、1 (a+b) ~ 3 の角錐状石器の特徴と類似する点が多いことから、角錐状石器を製作している最中に、破損した資料である可能性が高い。前述のとおり、1 (a+b)・2・11 (a～k) のホルンフェルス 1において、角錐状石器の製作工程が窺える資料がみられたが、ガラス質黒色安山岩 1においても同様の製作工程が行われていることが本接合資料において観察された。12 (d+e) は、左側縁に鋸歯状の調整加工がみられ、上面から幅広剥片12d が剥離されている。12e を石核として識別したが、12 (d+e) の左側縁の鋸歯状の調整加工に着目すると、12 (d+e) の資料も、12 (a～c) の資料と同様に、角錐状石器を製作しようとして破損した資料である可能性が高い。このように、12 (a～e) はわずか5点の接合資料ではあるが、2個体の角錐状石器を製作しようとした痕跡が窺える資料であり、本ブロックを特徴づける接合資料であるといえよう。

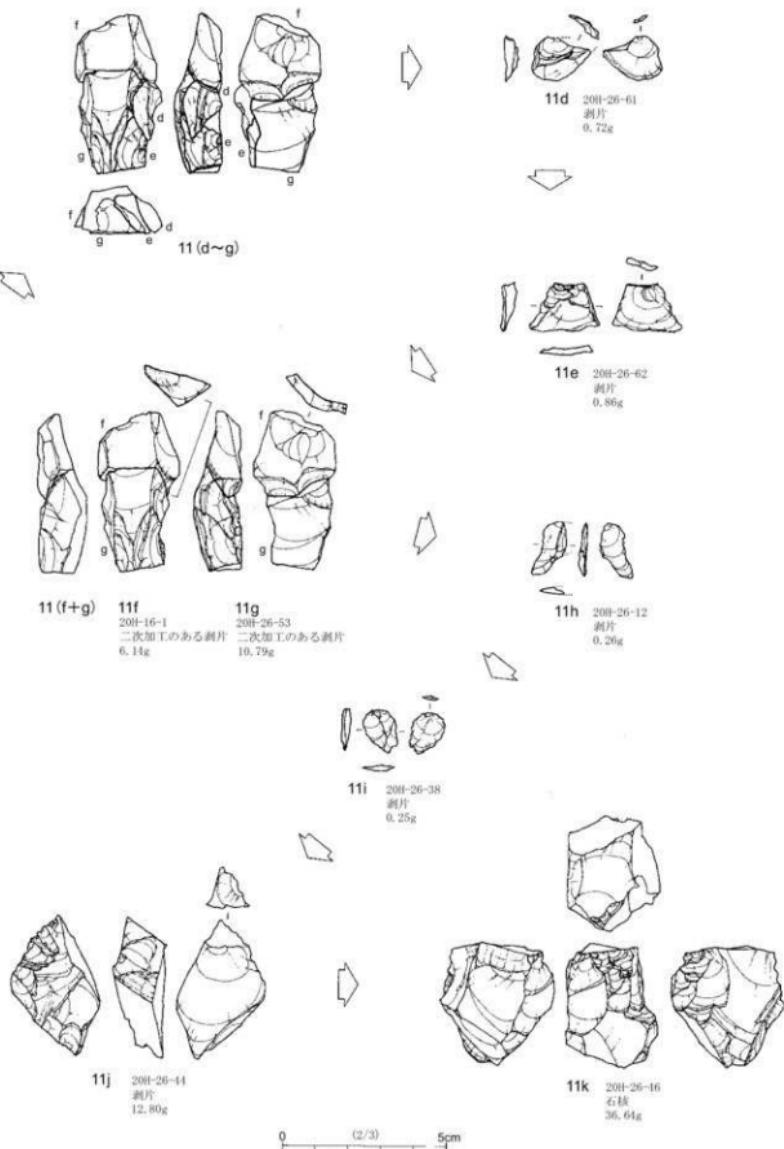
13 (a～e) は、12 (a～e) と同一母岩であるガラス質黒色安山岩 1が用いられた接合資料である。表面左上部を打面として縦長剥片13a を剥離している。その後、上面下部を打面として、頭部調整を行った後に、幅広剥片13b と13c と13 (d+e) を連続的に剥離している。これらの剥片には調整加工は行われていないことから、石核成形に伴う接合資料である可能性が高い。12 (a～e) の接合資料においても、頭部調整が顕著に行われていたことが観察されている。ガラス質黒色安山岩 1は頭部調整を頻繁に行なながら、石核成形を行って、目的とする縦長剥片を剥離したことが推察される。

14 (a～d) は分割礫を素材として、分割面を打面として固定し、頭部調整を頻繁に行なながら、縦長剥片を剥離したことが観察される接合資料である。ガラス質黒色安山岩 2が用いられている。上面の分割面を打面として固定して、縦長剥片を数枚剥離している。14a は、上面右下部を打面として剥離された縦長剥片を素材として、右側縁と左側縁下部に調整加工が施されたナイフ形石器である。調整加工がやや粗雑でプランティング加工と捉えることができない資料である可能性もあるが、縦長剥片を素材として、打面を基部として設置して、基部側に調整加工が集中していることから、ナイフ形石器として識別した。形状的には、右側縁上部に素材の縁辺を残す1 (a+b) の角錐状石器と類似している。いずれにしても、本ブロックにおいては、縦長剥片を目的に剥離して、素材打面を基部として設置して角錐状石器やナイフ形石器を製作しようとしている痕跡が窺えることが最大の特徴といえよう。14a を剥離した後にも、頭部調整を行なながら、上面左下部を打面として、縦長剥片14b が剥離されている。14b を剥離した後に、右側面上部に打面を転移して、打面再生剥片14c が剥離されている。残核である14d は、14c によって作出された打面から、頭部調整を頻繁に行なながら縦長剥片が連続的に剥離されていることが観察される。14 (a～d) は比較的良質なガラス質黒色安山岩 2が用いられており、上面を打面として設置して、打面再生を行なながら、規格的な縦長剥片を量産している接合資料といえる。

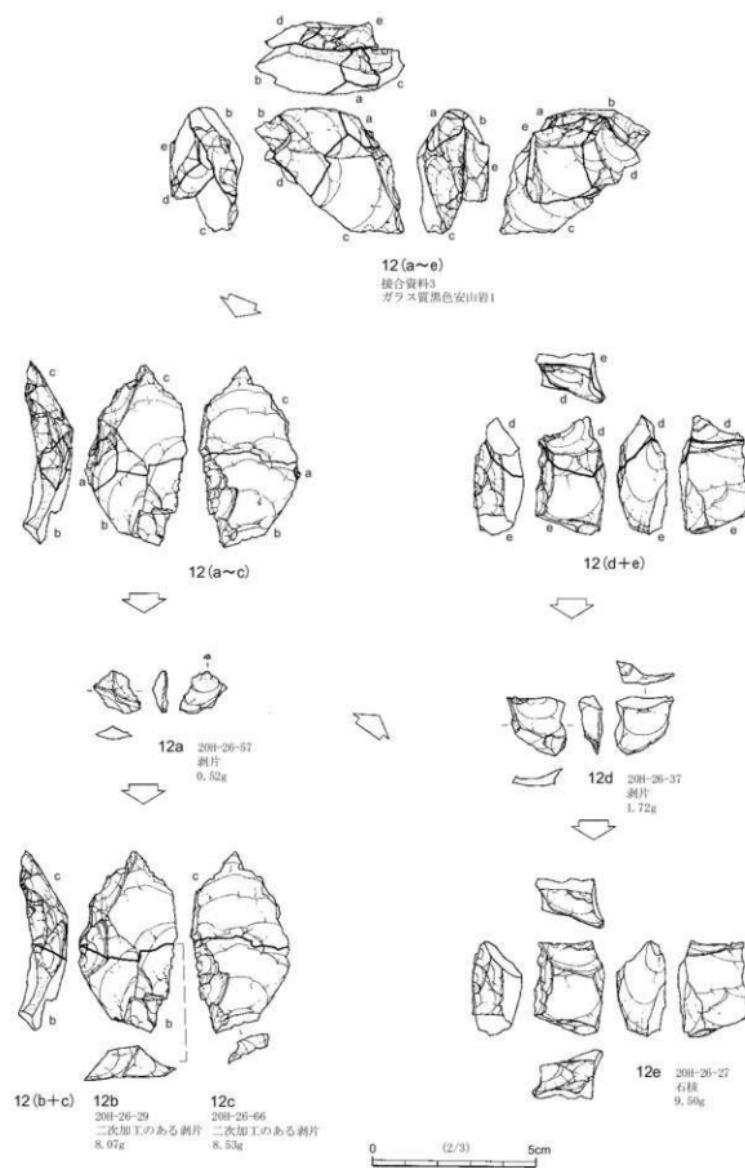
以上のとおり、本ブロックからは、分割礫を素材として縦長剥片を生産して、これらを素材として、打面を基部に設置して、角錐状石器やナイフ形石器が製作されていることが観察された。



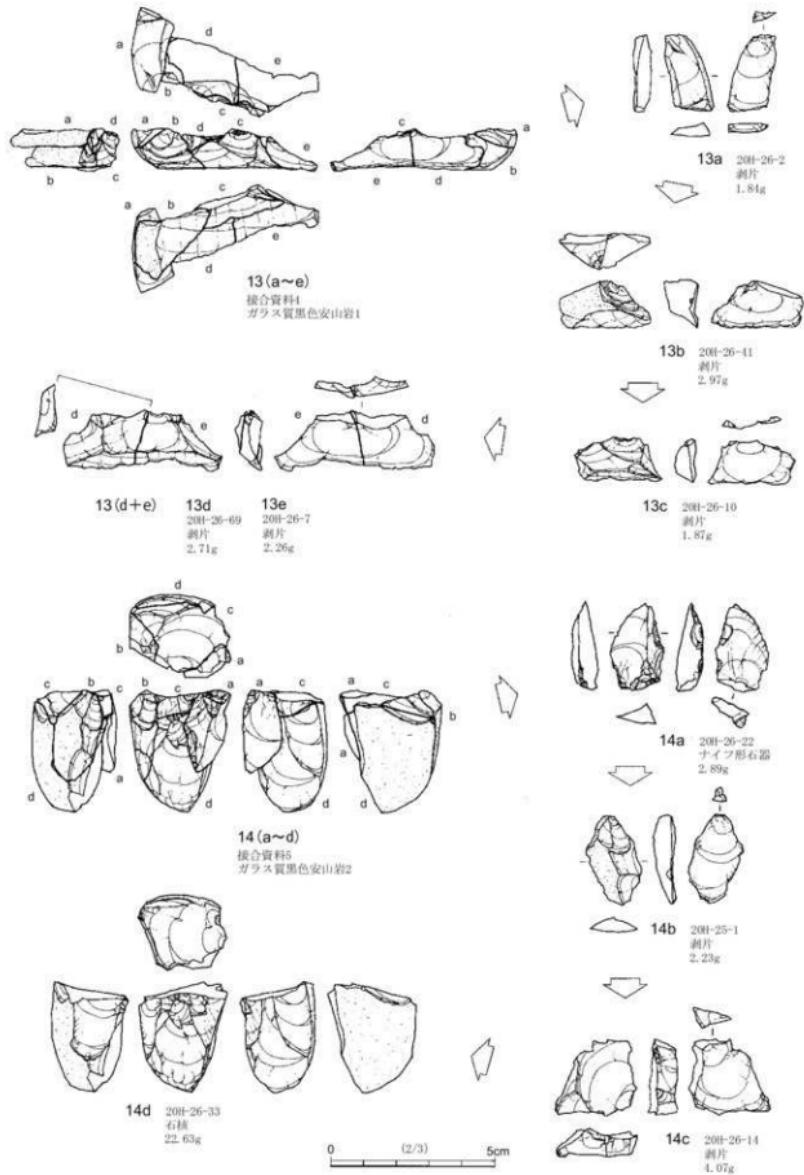
第31図 第5地点出土石器 (2)



第32図 第5地点出土石器 (3)



第33図 第5地点出土石器 (4)



第34図 第5地点出土石器 (5)

第32表 西初石五丁目遺跡石器属性表(1)

出 土 地 点	グ リ 物 ツ 番	道 核 ド 号	器 物 記 号	石 器 種 類	母 岩	接 合 番 号	持 持 番 号	重 量 g	X	Y	Z
第 5 地 点 20H-18 1	二次加工のある剥片	ホルンフェルス	1 1 11f	6.14	-14271.304	7804.974	19.260				
第 5 地 点 20H-25 1	剥片	ガラス質黒色安山岩	2 5 14b	2.23	-14271.665	7803.858	19.309				
第 5 地 点 20H-25 2	二次加工のある剥片	玉髓	1	7	1.67	-14271.196	7803.753	19.280			
第 5 地 点 20H-25 3	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1	4	1.69	-14270.515	7803.790	19.055			
第 5 地 点 20H-25 4	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		0.37	-14270.941	7803.799	18.987			
第 5 地 点 20H-26 1	剥片	ホルンフェルス	1 1 11c	1.16	-14271.682	7805.535	19.014				
第 5 地 点 20H-26 2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1 4 13a	1.84	-14271.546	7805.120	19.299				
第 5 地 点 20H-26 3	剥片	ホルンフェルス	1		0.62	-14271.156	7804.440	19.065			
第 5 地 点 20H-26 4	角錐状石器	玉髓	1	3	4.72	-14271.057	7804.826	19.140			
第 5 地 点 20H-26 5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		1.80	-14271.020	7804.858	19.096			
第 5 地 点 20H-26 6	剥片	ガラス質黒色安山岩	4		2.93	-14270.810	7804.923	19.172			
第 5 地 点 20H-26 7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1 4 13e	2.26	-14270.924	7803.559	19.067				
第 5 地 点 20H-26 8	剥片	ホルンフェルス	1 1 11b	26.32	-14270.645	7804.913	19.070				
第 5 地 点 20H-26 9	剥片	ホルンフェルス	1		0.92	-14270.292	7805.454	19.093			
第 5 地 点 20H-26 10	剥片	ガラス質黒色安山岩	1 4 13e	1.87	-14270.314	7805.241	19.130				
第 5 地 点 20H-26 11	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		1.15	-14270.027	7804.737	19.236			
第 5 地 点 20H-26 12	剥片	ホルンフェルス	1 1 11h	0.26	-14270.456	7804.512	19.089				
第 5 地 点 20H-26 13	微細剥離のある剥片	ホルンフェルス	1 1 11a	10.28	-14270.719	7804.249	19.055				
第 5 地 点 20H-26 14	剥片	ガラス質黒色安山岩	2 5 14c	4.07	-14270.839	7804.881	19.160				
第 5 地 点 20H-26 15	剥片	ガラス質黒色安山岩	1		1.60	-14270.666	7805.983	19.259			
第 5 地 点 20H-26 16	剥片	ホルンフェルス	1		1.65	-14268.929	7805.896	19.322			
第 5 地 点 20H-26 17	砂片	ホルンフェルス	1		0.16	-14268.787	7806.242	19.325			
第 5 地 点 20H-26 18	剥片	ガラス質黒色安山岩	2 6 2a	3.53	-14268.719	7805.986	19.292				
第 5 地 点 20H-26 19	剥片	ガラス質黒色安山岩	2 6 5b	1.92	-14269.047	7806.304	19.272				
第 5 地 点 20H-26 20	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		2.07	-14269.507	7805.565	19.241			
第 5 地 点 20H-26 21	角錐状石器	ホルンフェルス	1 2 1a	1.63	-14269.294	7805.881	19.221				
第 5 地 点 20H-26 22	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	2 5 14a	2.89	-14269.606	7804.570	19.153				
第 5 地 点 20H-26 23	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		0.65	-14269.925	7805.567	19.137			
第 5 地 点 20H-26 24	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		0.95	-14269.214	7804.663	19.124			
第 5 地 点 20H-26 25	剥片	ホルンフェルス	1		1.08	-14268.846	7806.564	19.159			
第 5 地 点 20H-26 26	二次加工のある剥片	玉髓	2	6	4.03	-14269.438	7804.289	19.110			
第 5 地 点 20H-26 27	石核	ガラス質黒色安山岩	1 3 12e	9.50	-14270.370	7806.411	19.101				
第 5 地 点 20H-26 28	石核	ガラス質黒色安山岩	4		10	21.98	-14268.407	7804.705	19.120		
第 5 地 点 20H-26 29	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1 3 12b	8.07	-14269.517	7806.334	19.071				
第 5 地 点 20H-26 30	剥片	ガラス質黒色安山岩	3		3.60	-14269.427	7806.256	19.090			
第 5 地 点 20H-26 31	剥片	ガラス質黒色安山岩	2		0.41	-14269.751	7806.015	19.065			
第 5 地 点 20H-26 32	剥片	ホルンフェルス	1		0.15	-14270.197	7804.281	19.072			
第 5 地 点 20H-26 33	石核	ガラス質黒色安山岩	2 5 14d	22.63	-14270.606	7805.038	19.060				
第 5 地 点 20H-26 34	石核	ガラス質黒色安山岩	4	9	16.56	-14269.223	7805.068	19.068			

第33表 西初石五丁目遺跡石器属性表(2)

出	グ	遺	枝	器	石	母	接	種	重			
土	リ	物				岩	合	因		X	Y	Z
地	ツ	番				番	番	番				
点	ド	号	記	種	材	号	号	号	量			
第 5 地 点	20H-26	35		角錐状石器	ホルンフェルス	1		2	3.98	-14268.503	7805.162	19.073
第 5 地 点	20H-26	36		剥片	ガラス質黒色安山岩	3	7		0.77	-14268.857	7805.351	19.025
第 5 地 点	20H-26	37		剥片	ガラス質黒色安山岩	1	3	12d	1.72	-14271.458	7806.822	19.000
第 5 地 点	20H-26	38		剥片	ホルンフェルス	1	1	11i	0.25	-14270.968	7805.578	18.974
第 5 地 点	20H-26	39		剥片	玉髓	2			1.89	-14270.954	7804.111	19.004
第 5 地 点	20H-26	40		剥片	ホルンフェルス	1			0.43	-14270.716	7804.479	19.026
第 5 地 点	20H-26	41		剥片	ガラス質黒色安山岩	1	4	13b	2.97	-14270.713	7805.928	19.082
第 5 地 点	20H-26	42		碎片	ガラス質黒色安山岩	2			0.17	-14269.643	7804.111	18.990
第 5 地 点	20H-26	43		剥片	ガラス質黒色安山岩	3			15.72	-14270.051	7804.958	18.895
第 5 地 点	20H-26	44		剥片	ホルンフェルス	1	1	11j	12.60	-14270.141	7805.375	19.066
第 5 地 点	20H-26	45		剥片	玉髓	2			0.45	-14270.611	7804.467	19.014
第 5 地 点	20H-26	46		石核	ホルンフェルス	1	1	11k	38.64	-14270.549	7804.896	18.395
第 5 地 点	20H-26	47		剥片	ガラス質黒色安山岩	1			1.18	-14271.053	7804.729	19.084
第 5 地 点	20H-26	48		剥片	ガラス質黒色安山岩	3	7		4.24	-14269.646	7805.944	19.070
第 5 地 点	20H-26	49		剥片	ホルンフェルス	1			8.82	-14270.691	7804.964	18.960
第 5 地 点	20H-26	50		碎片	ガラス質黒色安山岩	1			0.22	-14269.217	7805.737	19.140
第 5 地 点	20H-26	51		剥片	ホルンフェルス	1			2.37	-14270.994	7804.018	19.025
第 5 地 点	20H-26	52		碎片	ホルンフェルス	1			0.16	-14268.781	7805.817	19.109
第 5 地 点	20H-26	53		二次加工のある剥片	ホルンフェルス	1	1	11g	10.79	-14268.682	7806.201	19.086
第 5 地 点	20H-26	54		角錐状石器	ホルンフェルス	1	2	1b	8.28	-14269.232	7806.074	19.078
第 5 地 点	20H-26	55		剥片	ガラス質黒色安山岩	4			0.49	-14269.560	7805.752	19.101
第 5 地 点	20H-26	56		碎片	ホルンフェルス	1			0.12	-14268.898	7805.814	19.090
第 5 地 点	20H-26	57		剥片	ガラス質黒色安山岩	1	3	12a	0.52	-14269.238	7804.705	19.000
第 5 地 点	20H-26	58		碎片	ガラス質黒色安山岩	3			0.15	-14269.038	7805.851	19.076
第 5 地 点	20H-26	59		剥片	玉髓	1			8.50	-14269.229	7805.842	19.081
第 5 地 点	20H-26	60		剥片	ガラス質黒色安山岩	3			10.33	-14269.340	7804.423	18.990
第 5 地 点	20H-26	61		剥片	ホルンフェルス	1	1	11d	0.72	-14268.778	7805.978	19.027
第 5 地 点	20H-26	62		剥片	ホルンフェルス	1	1	11e	0.66	-14268.599	7806.321	19.028
第 5 地 点	20H-26	63		剥片	ガラス質黒色安山岩	2			0.25	-14269.143	7806.244	19.046
第 5 地 点	20H-26	64		碎片	ホルンフェルス	1			0.11	-14269.427	7805.771	19.075
第 5 地 点	20H-26	65		二次加工のある剥片	ホルンフェルス	1		5	3.08	-14269.155	7806.089	19.055
第 5 地 点	20H-26	66		二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1	3	12c	8.53	-14269.334	7805.814	19.013
第 5 地 点	20H-26	67		碎片	ガラス質黒色安山岩	2			0.05	-14268.889	7805.357	19.009
第 5 地 点	20H-26	68		剥片	ガラス質黒色安山岩	1			0.12	-14270.181	7806.476	18.958
第 5 地 点	20H-26	69		剥片	ガラス質黒色安山岩	1	4	13d	2.71	-14271.094	7806.615	18.968
第 5 地 点	20H-26	70		剥片	玉髓	2			0.16	-14270.209	7804.127	18.922
單独出土	17J-78	2		保証	流紋岩				38.93	-14171.622	7805.276	19.237

第6章 まとめ

今回報告した4遺跡からは、6か所の石器集中地点が検出され、342点の石器が出土した。本章では、これらの成果を遺跡別にまとめ、石器群の様相と位置付けについて記載する。

1. 市野谷中島遺跡

旧石器時代の文化層別ブロック位置図は第8図のとおりである。文化層は第1文化層のみ検出された。石器の出土総数は19点で、1か所のブロックと1か所の単独出土地点が検出された。第1文化層の石器群は、V層～IV層下部に生活面を持ち、第1ブロックの1か所の石器集中地点で構成される。総計18点出土し、角錐状石器1点・ナイフ形石器1点が主要器種である。石材は黒曜石が主要石材で、11点出土している黒曜石の推定産地の内訳は、高原山甘湯沢群7点、蓼科冷山群4点である。

2. 市野谷向山遺跡

旧石器時代の文化層別ブロック位置図は第14図のとおりである。今回報告する成果は、第7次調査分のみであるが、第1次～第6次調査分については、報告書第670集（2011年刊行）で報告済みである。第7次調査では、報告済みの第2文化層第9ブロックと第10ブロックの遺物の拡がりが確認できた。第2文化層は、V層に生活面を持つ。第7次調査分としては、第9ブロックから5点、第10ブロックからは16点の石器が出土し、あわせて21点の石器が出土した。黒色頁岩のナイフ形石器と硬質頁岩の彫器が出土した。今回と報告済みの成果によって、第2文化層の石器群が、黒色頁岩を主体とし、石刃素材のナイフ形石器などが製品として遺跡に搬入されていることがより明確となった。また、石器群の様相から、下縦型石刃再生技法による石器群として捉えられ、石刃の搬入ルートや集団の移動領域の解明が課題となった石器群といえよう。類似する石器群としては、鎌ヶ谷市東林跡遺跡のV層出土石器群があげられる。

3. 市野谷入台遺跡

旧石器時代の文化層別ブロック位置図は第21図のとおりである。今回報告する成果は、第27・28次調査分で、第1次～第26次調査分については、報告書第606集（2008年刊行）で報告済みである。今回報告する第27・28次調査では、報告済みの第3文化層と同一段階と捉えられる石器群が検出できたので、第3文化層第26ブロックとして報告する。第26ブロックは総計225点の石器が出土し、定型的な石器は削器のみで、製品の点数がきわめて低い。大半が礫・礫片（196点）で礫群を形成している。V層～IV層下部に生活面を持つ。12点出土している黒曜石の推定産地の内訳は、高原山甘湯沢群11点、箱根烟宿群1点であった。

4. 西初石五丁目遺跡

旧石器時代の出土地点位置図は第27図のとおりである。今回報告する成果は、第18・19次調査分で、第1次～第17次調査分については、報告書第596集（2008年刊行）で報告済みである。1か所の集中地点が検出され、IV層下部～IV層中部に生活面を持つ第5地点の石器群が検出された。角錐状石器4点（個体点数としては3点）、ナイフ形石器1点が主要器種である。これらはいずれも、縦長剥片を素材としており、打面部を基部に設置して鋸歯状の粗い調整加工が施されていた。類似する石器群としては、大久保遺跡第2a文化層の石器群があげられる。

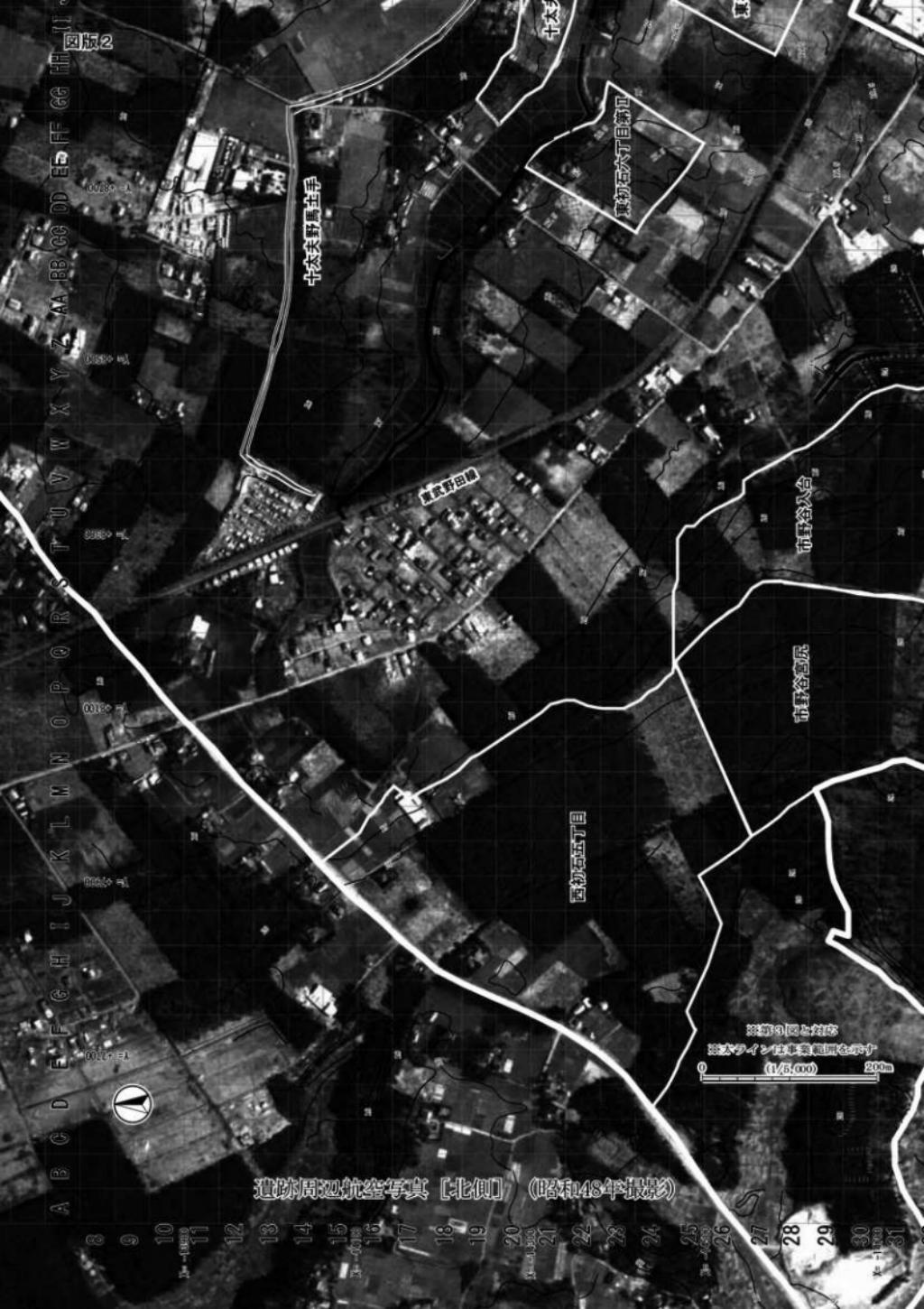
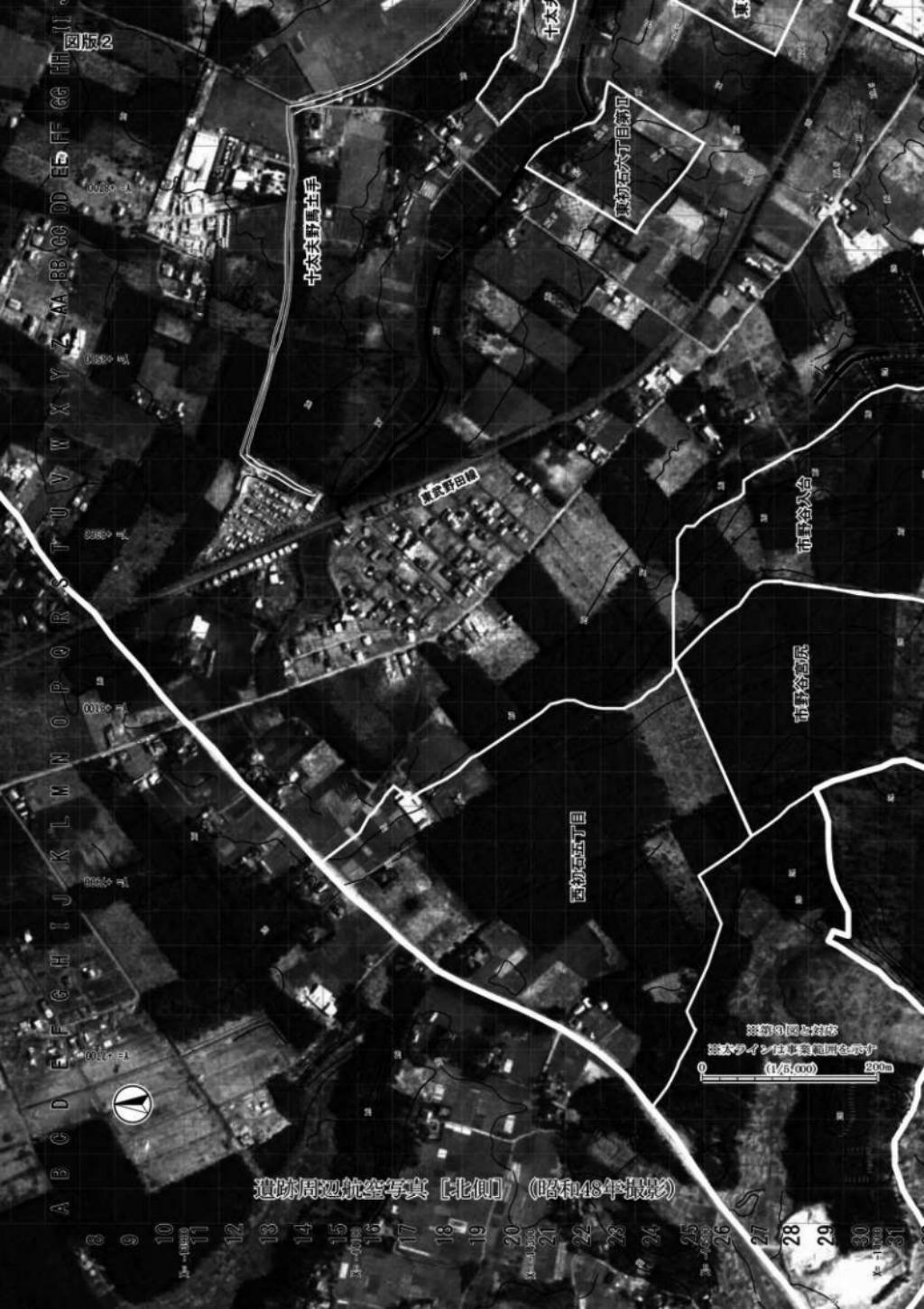
写 真 図 版



※第3-6号と対応
※人ラインは荒川新市街地の事業範囲を示す。

0 (1/25,000) 1.000m

遺跡周辺航空写真 (昭和22年撮影)





遺跡周辺航空写真【南側】(昭和48年撮影)

添付4図と対応
※マップ上1km相当面積を示す
(1/5,000) 200m



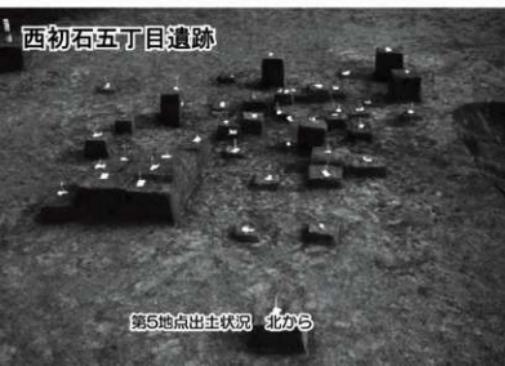
市野谷向山遺跡



市野谷八台遺跡



西初石五丁目遺跡



市野谷中島遺跡

※ [] 内は、黒曜石产地推定結果を示す。

第1文化層 第1ブロック



市野谷向山遺跡

第2文化層 第9ブロック



第2文化層 第10ブロック



0 (2/3) 5cm

旧石器時代出土石器(1)

市野谷入台遺跡

※ [] 内は、黒曜石产地推定結果を示す。

第3文化層 第26ブロック



西初石五丁目遺跡

第5地点出土石器



0 (2/3) 5cm

旧石器時代出土石器(2)

報告書抄録

ふりがな 書名	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書					
副書名	流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡 旧石器時代編					
卷次	6					
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告					
シリーズ番号	第706集					
編著者名	新田浩三					
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター					
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809番地の2 TEL043-424-4848					
発行年月日	西暦 2013年3月22日					
所収遺跡名	所 在 地	コード	経緯度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市野谷中島遺跡 (1)～(8)	流山市市野谷 693-1 ほか	12220 055	北緯 35度 51分 49秒 東経 55分 23秒	20021001 ～ 20040326	15,678	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
市野谷向山遺跡 (7)	流山市市野谷 494-2 ほか	12220 036	35度 51分 40秒	20101013 ～ 20101216	1,571	
市野谷入台遺跡 (27)・(28)	流山市市野谷 655-1 ほか	12220 042	35度 51分 53秒	20081104 ～ 20090123	2,008	
西初石五丁目遺跡 (18)・(19)	流山市西初石 ごちょうめ 五丁目62-5 ほか	12220 045	35度 52分 12秒	20060626 ～ 20080526	11,361.18	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
市野谷中島遺跡 (1)～(8)	包藏地	旧石器時代	石器集中地点 1か所	石器総点数19点 角錐状石器1点、ナイフ形石器1点	V層～IV層下部の石器群からは、角錐状石器とナイフ形石器が出土した。	
市野谷向山遺跡 (7)	包藏地	旧石器時代	石器集中地点 2か所	石器総点数21点 ナイフ形石器1点、彫器1点	VII層の石器群からは、黒色頁岩のナイフ形石器と硬質頁岩の彫器が出土した。	
市野谷入台遺跡 (27)・(28)	包藏地	旧石器時代	石器集中地点 1か所 礫群 1か所	石器総点数226点 削器1点、二次加工のある剥片6点	V層～IV層下部の石器群が礫群を伴い出土した。	
西初石五丁目遺跡 (18)・(19)	包藏地	旧石器時代	石器集中地点 1か所	石器総点数76点 角錐状石器4点、ナイフ形石器1点	IV層下部～IV層中部の石器群からは、縦長剥片素材の角錐状石器が出土した。	
要約	今回所収した4遺跡からは、5か所の石器集中地点が検出され、342点の石器が出土した。今回とこれまでの調査成果から、坂川と大堀川の源流域に、旧石器時代の遺跡群が形成されていることが浮き彫りになった。そのなかで注目されるのは、市野谷向山遺跡第2文化層の石器群で、VII層に生活面を持ち、黒色頁岩を用いた石刃素材のナイフ形石器が製品として搬入されていた。また、市野谷中島遺跡と市野谷入台遺跡において黒曜石の産地同定を行い、本地域での黒曜石の石材搬入の変遷の様相が把握できた。					

千葉県教育振興財団調査報告第706集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書6

—流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡
市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡—

旧石器時代編

平成25年3月22日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター
発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿6-5-1
公益財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市夷渡809番地の2
印 刷 株式会社 東ブリ
千葉県船橋市咲が丘1-11-9
